

人骨發掘。里馬から自動車二時間のルリン町墓地から人骨が出て、そこで例の穿顛術を施した古代の頭骨が得られる。廣島縣人水野氏は、其處で棉花耕作事業の傍ら、多くの古骨を集めて研究して居られる。



穿顛術を施した頭骨

料理。支那人の料理店があつて、他の土地同様、美味い支那料理が食べられる。エデンと云ふ獨逸料理店があつて、度々午食に行つたが、獨逸料理でトルテや色々の煮果物を出し、ビールが飲める。アルカチョフアは東京では稀にしか有りつけないが、智利と同様、此處では到る處で澤山食べられる。ビスコに産する『アグア、デエンテ』と云ふ祕露ブランドイは上等な酒だと云ふ。中でもイタリヤと云ふのが一番上等だと左黨の邦人から聞いた。

草花。その美事なことは南米第一に推したい。氣候風土が適當な爲めか、北ブラジルから一巡りする間には比敵する程の地方がなかつたと思ふ。

氣候。緯度上の祕露は熱帯だけれども、西海岸は、南から上つて来るフンボルト潮流が氣候を和げる。雨は稀有で、七年に一度位降ると云ふ。雨の降るのは、暖流が反對に北から流れて来る時で、魚が死ぬと云ふ。棉も不作なさうだが、其の跡は土地が汲水して豊作だと云ふ。

アンデス山脈は海岸、中央、東方と幾脈もあつて氣候を色々に別つ。祕露國內でもアマゾン河上流地方は、アマゾン濕潤森林地帯と云つて、氣候が他と大差がある。河に沿いて下るに従つて熱くなる。と云ふ。何しろ西北エクワドル、北東コロンビア、東ブラジル、東南ボリヴィア、南智利と界し、百四十三萬方軒（日本の三倍）の國であるから、山脈が幾列にも縦走し、氣候も格段に相違する筈であ

る。この地域に人口僅に五百萬である。

外人耕地。元名譽領事カロス・ラルコ・エレラ氏がチクリン耕地を經營し、其處に邦人契約移民が二百五十人働いてゐた。里馬現住の有力者の一人も曾て其處で耕主と移民との間の事務通譯などを務めてゐた人と云ふ。此耕地は祕露に於ける模範的農場と云はれるもので、移民も皆満足して働いてゐる。水道、下水設備、住居設備なども完全で、瑞西人のドクター・ブツシユ氏を耕地醫師として雇ひ、病院藥局の設備もあつたといふ話を聞いた。

ラ・プンタのホテルに往つた折、一米人が、アンデスの東側、星コカ栽培地の先きに、コンセプシオンを得て、北米から三四十家族を連れて來たのであつたが、交通があまりに不便、其他の爲めに、大部分は逃げ出して、今やつと數家族が残つてゐると話した。後者の様な不首尾は、日本人には近年は無いと云ふ。

パス・ソルダン氏は里馬醫科大學衛生學教授で、里馬醫學アカデミヤ、伯國リオ醫學アカデミア、其他の會員で、國際聯盟衛生部や、汎米衛生會議、南米諸國衛生會議には祕露代表として度々出席してゐる學者である。國際醫人であり、里馬の活動家である。サンチアゴ衛生社會省顧問の米人ロング

の紹介でその世話になつた。獨逸語は話さず、英語を話す。舞臺でクラシックを演じてもう貴公子然たる風采の人だ。初めて氏を訪問した際は、彼我の疾病研究、祕露醫事教育、衛生に關する事項を話した。移民問題に就いては觸れなかつたが、今度の漫遊に就いて所感を問はれ、見學遊歴した南米諸國の衛生醫事視察の狀況を一通り話した。所が、驚いたのは、翌日の『エ



氏イニチスチバと氏ントルバ

して居る點に興味を感じた。即ち一節に、『千六百年代には被支配國を支配するに宗教を以てした。千七百年代には商業を以て之に替へ、八百年代には新法令を以て、千九百年代には衛生を以てした。故に初には僧侶が先頭で次には商人、次には法律家と醫者が先頭に立つたのである』と。それで石原は

醫者で南米の衛生状態を研究してゐるに就いては云々としてある。其の新聞は氏からも著者に届けて呉れた。

バス・ゾルダン氏は秘露醫事衛生發達の爲め努力を續けてゐる。汎米衛生會議では各國に衛生省設置を決議してゐる。それが他では漸次實現を見つゝある。秘露でも衛生慈善及勞働省の設置を主唱してゐる。其他社會衛生的事業の發達に務めてゐる醫界の有力者である。

里馬の醫師数は三百名で、過剩の状態であると云ふ。邦醫に池田四郎君と榎本貞道君とがある。里馬とカイヤオ兩市在留同胞は一萬を超え、大統領並に外務大臣も邦人に對しては好感を有するが、現在土地の醫師過剩の爲め、政府は外人醫の醫師試験並に開業を許可せぬ方針の由。

便利なことは、夜間の診療と賣藥を、順番で醫師と藥局とが受持つて呉れることで、當番は新聞で分る。

金の引出しや、乗船切符、兩替等は旅行中の煩雜事項だが、こゝでは領事館員の關係で、北米グレス會社で悉皆用が足りた。

第十四章 カイヤオ港よりパナマまでの船路

※航程一〇八六哩——五日程。

- 一、世界の極の船路 里馬辭去——疫病フィルムを喜ぶ——乞食袋——船室の花——里馬の空——獨人と米人——新婚旅行——サラヅエリ港——デザートの里——大海鹽——寄港表にないタヤラ港——パナマ帽——グワヤキール沖——針路變ず——星光燦爛——世界の極の旅——明るさに甦る

十一月三日、水曜日。午前九時半、公使館の車で、福島君と池田ドクトル同乗、野々宮氏邸訪問、夫人に暇乞して、外務省に出頭した。大臣から名刺に歓迎の意を記して贈られたの禮と暇乞のためだつた。十時、省庭の掃除が出来た許りの處で、祕書も出勤してゐない。福島君を煩はし、丁寧な傳言と名刺を當直の人に托す。醫科大學學長、衛生局長も未だ出所されず、同様名刺を託して辭去。ロアイサ病院にバチスチニイ氏を訪ふ。

例の狭い廊下につめかけた患者の臭氣の中を、御免々々と分けて研究室へ通る。未だ來られない。名刺を頼んで玄關裏の階段で、庭の草花を眺めた。葵が非常に多い。十時半公使館に赴き、公使、遠藤、三村、細川諸君に暇乞して歸宿。午前中に大方片付き、午後残りを纏めたり、世話になつたボー

いに謝禮をしたり。

二時前、福島池田兩君が手傳ひに來られる。齋藤千之君からの電話で、里馬のフィルム技師がヴェルガのフィルムを大急ぎで完成して呉れた、三時に持参するとの趣。有難い、望外の幸である。やがて、公使も慇々來訪せられ、工藤、野々宮諸君、三時頃齋藤君がフィルムに正復の説明書を添へて持参された。

里馬で數名の患者を見學した上、有病地方の山河、地勢、民俗、そして患者及びバチスチニ氏研究標本を一舉に見得らるゝフィルムを得たのは、齋藤君の御盡力の賜物で深く感謝する處である。アランダスを單獨で越えて來た目的を、豫期以上に達し得たことに就いて御禮を述べた。三時卅五分、公使、荒井領事、福島君と同乗し、例の伯國獨特のズツクの乞食袋を積んでホテルを出た。坦々たるアスファルト道の右方に、破れ自動車をコンクリート臺に置いた事故豫防の奇抜な警告を、見納めに注視した。

四時、カイヤオ着、波止場では、荷物擔ぎの喧騒に、更に泥酔者が一枚加はつて益々波紋を擴げてゐる所であつた。

扱てお別れにと、公使も著者も交々記念撮影をする。やがて、先刻公使が見付けた秘路の外交官を乗せて、第一番のランチは沖に向つた。



税關吏は吾々と握手したのみで出國検査が済んだ。豫め外務省から打ち合つて頂いたお蔭だ。輸出

禁止規定に従へば、荷物は嚴重に検査するのが例である云ふ。

カ イ ヤ オ 港 橋 棧

第二ランチは、荒井領事、福島、池田、野々宮、太田諸君を乗せて、一哩沖のサンタ・アナ號に波を蹴つて進んだ。船上で待つて居られた岸夫人から美事なカネーションの花束を贈られる。黒飛、岡田幾松兩君から目覺むる許りの美しい薔薇と百合、紅、白、黄の薔薇の花束二個を送られ、船室の洗面器に飾る。バナマまでは保つと言ふ。船中が次第に混雜して來て、船出の氣分となる。然し、船客は左程多くない。五時過ぎ、盡きぬ名残を惜みつゝ、船を遠去かるランチを寫す。五時廿分ランチは懐かしの人影と共に波止場の内壁に姿を消した。船上に立つて、それらの人々の健康と、異郷の天地に健闘される前途の幸福とをいつまで

も祈念する。二週間の愉快な滞在生活から、再び孤影を船に托した物寂しさ。靜かに暮れてゆくカイヤオの港灣を望んで、肅々たること久しかつた。



美事な齋薇

船は積荷を急いで、夜九時、徐ろに錨を抜く。上甲板よりカイヤオを眺め、更に眼を遠く連山の下に送れば、サンクリストバルの電柱一本の目標が、遙かに里馬市の所在を告げてゐる。諸君の厚誼の數々を回顧し、同胞將來の爲、健闘彌々幸あれかしと、カイヤオ港の燈火の見える限り、甲板に立ちつくした。夕、七時の晚餐の食卓の人々を想つてゐた。著者がバナマで下船すると云ふので、司厨長は、やはりバナマまでといふ二人の獨逸人と、一人の米人とを一卓にして呉れた。獨逸人の一人は漸く廿四五歳、一人は三十七八歳、共に商人だ。米人は三十五六歳、獨逸人と米人とは互に話さない。著者は三人共の話相手になつ

た。獨逸人は規帳面で、米人は氣さくだつた。

別を惜んだ里馬の人々を改めて回想した。心丈夫に思つたのは、在留同胞の數が甚だ多いこと、その上、諸君が克く協力團練してゐること、事業成績も相當に擧つてゐること等であつた。その點は、サンチャゴを去る時、ヴァルバレイソを辭する時の感じなどは異つてゐた。彼處では、在留邦人の數が甚だ少くて、諸君の寂しさが想ひやられたからである。

偕、このサンタ・アナ號は北米紐育グレース會社の船で三姉妹船、エリサ、ルイサ、及テレサと共に一萬噸。船室、食堂、甲板での客扱もよく、食物は材料も種類も豊富だつた。

だが、上船の際、ボーイが皆支那人であつたから不思議に思つて太田君に話したら、いや、支那人はなかく、良いと言はれた。専門家の言だから相違あるまいと考へたが、それは實際に確かめられた。太洋、天洋にも乗つたが、サンタアナの支那人はよく訓練されてると感じたのである。太洋、天洋の日本船員が劣るのではないが、サンタアナは智利、祕露から、中米、北米間の航路で、船客も各國人で邦船とは趣が違ふ。客扱も單純にはゆかないから格別な訓練を経てゐる所以と察した。食堂シチュワード長は米人であつたが、配皿ボーイ、船室ボーイ、浴室、靴磨、デツキボーイ等も、悉く、支那人であつた、喫煙室兼バーシチュワードは一番恰憫な支那人であつた。なかく、よく氣がついた。

夕食後喫煙室に上ると、恰も珈琲罐が沸つてゐる。モツカ皿で、自ら栓を廻はして酌む。香氣馥郁、味も佳く、ブラジルを去つて以來のものだつた。

この船に、新婚旅行に妻君の里に行く野々宮君の店員が乗つてゐるときいてゐた。紹介された夫君は、二三年前に來住し、新婦は祕露育ちの日本人で十七八歳に見えた。その晩は食堂へ出なかつたので、翌朝どうしましたと訊いたら、妻君が出たくなかつたからとのこと、日本語がまだ難かしい爲と思はれた。

十一月四日、航海第二日。昨日同様、天気はよく、涼しくて冬服でよかつた。右舷に山脈を見ながら北々西に航走する。社交室傍の書机に倚つて、午前中、里馬市の諸君に挨拶状を書いた。正午の頃、右手の山脈は例の灰褐色の色調が破れ、山頂は黒く下方は白雪の如く見えるのが連続して、珍らしく思つた。勿論、岩質が白いのである。二時半すぎ、海岸に一突角が見えて來た。突角の左に一汽船が見え、サヤヅエリ港に著くのである。やがて港外一哩半許に停船した。港といつても、唯、一突角があるだけで、港らしい設備はなく、船はいつも沖掛りの由。荒れたらとても上下船困難の處である。灰褐色の急傾斜の秃山脈の下に、稍平地があつて、小さい家が僅に數十軒、段々に參差してゐる。ひどく殺風景で、眼を瞠つても家並の間に樹木らしいものは無い。唯見付かつたのは一の小さな棧橋

のみであつた。

町の向つて左の方の海岸は、平地が左へ展開し、その間に珍敷くも所々に森が見え、三哩許離れて、今度は多少立派な建物のある小市街がある。そこは船付ではない。兩方の間に自動車が數臺通つてゐるのが見えた。

此處で下船する客十餘名、上船二三名。船が港に着いた時、擔荷夫が傳馬から船梯にどか／＼昇つて來る。親船は少しも動かぬが強いうねりで傳馬は數尺以上上下する。新婚夫妻はここで下船の筈である。著者は秃山の麓の草木に乏しい所だから、花はきつと喜ばれるに相違ないと、貰つた三つの花束の大薔薇を割愛し紙に包んで進呈した。花嫁さんは喜んで受けた。婿さんから十一月號の雑誌を頂戴した。迎へが來さうなものと、舷門に立つて見てゐると、印甸人の荷擔夫が上つて來る。やがて、中古の背廣で、カラーを付けない親方らしい五十歳位の、日本人らしい一人と、三十歳位の、背の高い、カラーをきちんとなつつけた、多少似よりの、容貌魁偉で確かに日本人らしい若者とが、注目してゐた著者には一向氣をとめず、船室の廊下に入つて行つた。

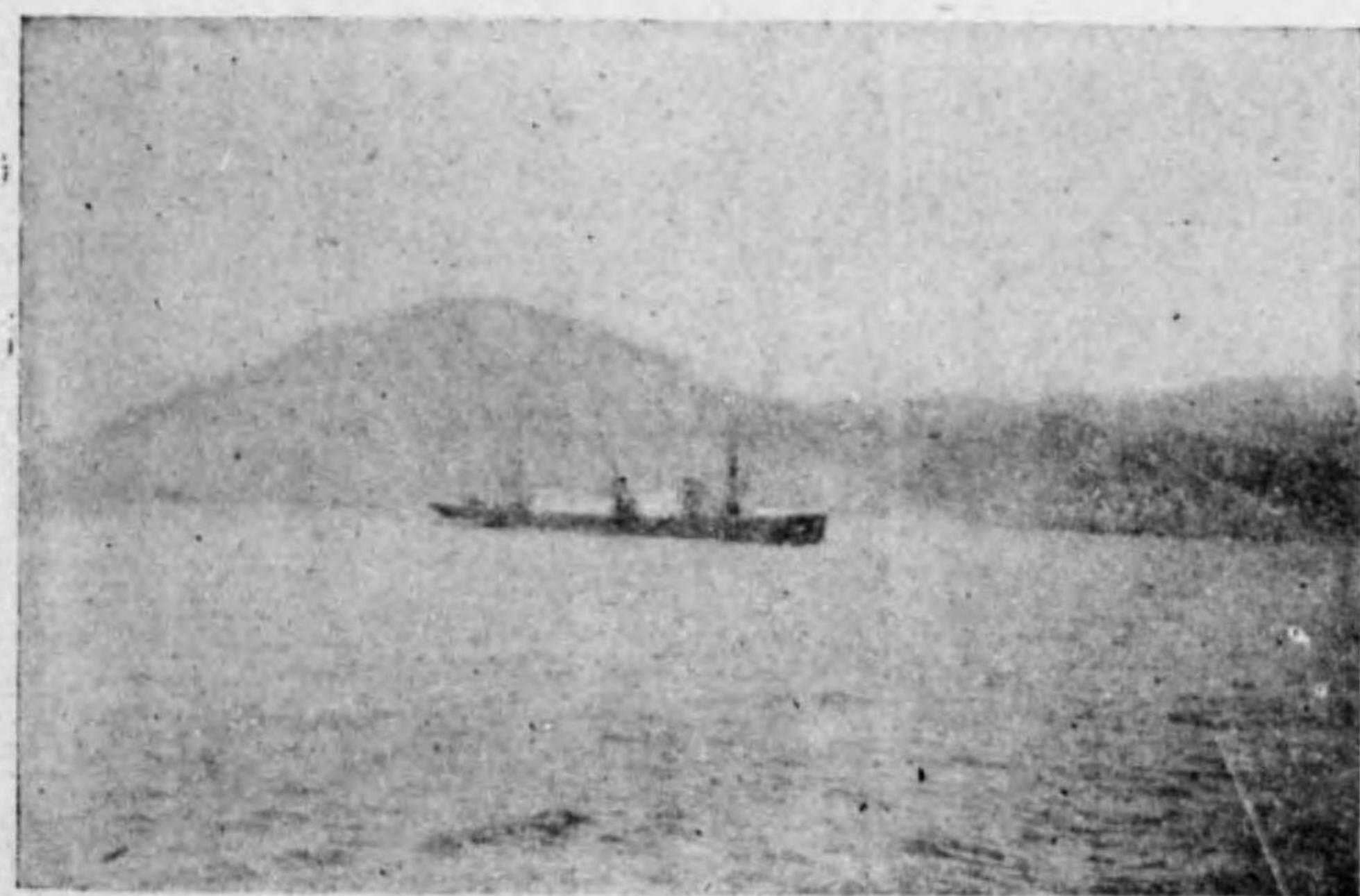
暫くして、若夫婦が二人と共に現れ、花嫁から先の老人をババだと紹介された。一行は舷梯を下りて、上下動する傳馬に巧みに乗移り、三十分ばかりもかかつて岸に着いた。午後四時頃、充分な西日をうけて行く舳舟を記念に撮影した。荒寥たる港で、親達は如何な生業に従事してゐるものか。母親

は無論日本人だらう。日本人は棲めば都といふが、新婚旅行には、そこは餘りにも非浪漫的に見えたのであつた。少くも廿年前位に來住したものだらうが、立派な婿さんを迎へた喜びを思ひやり、彼等の上に春秋多かれと祈つた。

五時出帆。六時薄暮の頃、どす黒い海水の面に、船に近く、人間の頭と見える怪物が群つて無氣味に動く、大海驢の群だ。七時頃右岸に電燈の多い町を見たが地名を知らない。珍らしく南航する一汽船に行き交ふ。

十一月五日、金曜日、航海第三日。曇つて涼しい。何事もなく北航する。三時頃豫告もない一小港タヤラに着く、例の如く荒涼たる山脈下の平地、こゝには突角もない。荒天には寄らない所と聞く。一時間停船、棉を積み船客十名程を下す。西海岸航路の寄航地の港名は、表に出てるが、希望によつては臨時の寄港もするといふ。この間に二三の商人がバナマ帽を賣りに來

サラダのリエザト



た。最も良質のものが米弗貨二十弗と稱した。勿論裝飾はしてない。俗にバナマ帽と云ふのも實は良質のものは祕露領のアマゾナス縣地方が原産で、バナマ帽は祕露の名産物だと云ふ事を知つた。船は絶えず潮流に乗り追風を受けて北航する。乗心地はいゝ。三日後にはバナマに著くから、心易くなつた無電室に行つて領事館宛に『クリストバル十日ニ出ル、ニユオリアンス行ノ船室リザーヴ願フ』と打電した。一語米貨二十六仙だつた。船の食卓の相客は、乗船して先づ氣になるものだ。最初の一晩は何となく氣遣はれるが、一夜慣れ、ば氣心は知れて面白くなり、二、三日目には早くも心易くなるのは誰もの旅の心理らしい。この船の相客とも今日は色々打解けて語り合ふ。

十一月六日、航海第四日。午前十一時には已に赤道、エクワードル國グワキール沖を航走する。これまで北北西の進路だつたのが、陸岸を遙かに離れ、この日は山を見ない。航路は北向となる。午後三時頃、グレース線の一姉妹船の南航に行合ふ。互に近く信號し、船員達は甲板に出て嬉しがる。荒模様を豫想されたか、甲板の取片付をしたが、天氣は依然曇のまゝ、潮に乗り、追風をうけて平穩に只管北走する。

曇り空は夜に入つて晴れ、星光燦爛、夕刻から暖く夏服に着換へる。ヴァルパレイソ以來灰褐暗色の山脈下に緑い物の影をとゞめぬデザート沿ひに航すること十餘日、薄暮暗靄に包まれた山色、暗黒

377 -

の水色は、全く近づくべからざる晦朦の荒野と思はれたが、今日、エクワードル沖に来て、一天俄に明るく、空氣も輕爽に、氣候も快適となつた。来る日も来る日も世界の果を旅する心地の、すさまじい風物を送迎して來たのが、今や、華やかに活き活きとした北米もすぐそこ、何となく甦つた氣がした。

夕刻一船を見た。追々と行ずりの船も多い邊に來た。手紙を認め、讀書に耽る。

十一月七日、日曜日、航海第五日。船の位置、正午には北緯五度十三分、西經八十度五分。昨正午から三百十九哩を航走した。海上一影もなく、唯、黒い雲。針路を北々東に轉じ、パナマに向つてゐる。明朝はパナマに著くから、今日も亦諸方への手紙を認め船のポストに托す。晚餐後二時間、行李を整頓して疲れる。上陸前日の行李の始末は、出發準備のそれと共に、旅行中の厄介の随一と思はれる。

第四篇

パナマより本國へ

第十五章 パナマ視察

一、パナマ — パナマ灣に入る — 宛然瀨戸内海 — 迎解舟 — 厳格な税關吏 — 氣濕甚し — 半面だけ清淨な道路 — 日本人理髮店 — 領事館 — 東洋人入國禁止法 — 日本人漁夫 — 生水甘露

十一月八日、月曜日。ほのぼのと明け渡る頃、船は機關の運轉を停めた。さてはと勇躍する。水先が來てゐた。

甲板に駈上つて眼前に展開された光景に暫く見惚れる。松の樹のかはりに、ここは椰子の緑の蔭を落した島々の散點した、正に瀨戸内海の景である。所々に樹林もある。午前六時、高い所の樹に陽が射してゐる。水面は全く鏡のやう。パナマ灣に入つたのであつた。上陸の支度はとくに出來てゐる。船はすぐ運河に入り、夕景迄に東口——實は北口。運河は東西にでなく、南北に通じてゐるから——クリストバルに抜けるのである。

水先が乗ると、船はすぐ徐行を始めバルボアに向ひつゝある。七時に税關吏や檢疫醫が來て社交室でバスポートを調べ、上陸者の望診があつた。小船が一艘來て、間もなく船員からバルボアのグレース社のエゼントからの手紙を渡された。十一月廿六日、桑港出帆の天洋丸の船室十六番をリザーヴし

たとの、カヤオ N・Y・Kの太田君からのケーブルを取次いだものであつた。廿三日出帆の筈であつたが植字の間違ひと思つた。七時半、領事館の南雲君が大きな艇船でやつて來られた。艇にグレース社の船旗が掲げてある。サンタアナは一寸停船した。其處はもう運河の入口の一寸外で廣い所である。

バルボアの高地は向ふ左に見える。艇船に移つて五分、税關前の低い岸壁に著いた。八時半である。

サンタアナは已に動き出し、運河に入つて見えなくなつた。

この艇船の來た時に、船員は移乗を告げたが、或る人がそれをよく知らずにあた。船が動き出し、運河に入つてしまつた爲、バルボアに上陸出來ず、クリストバル迄往つてしまつて、更に汽車でバナマ市へ歸へつて來たと云ふ事を聞いた。著者もカヤオを出帆する前に、船會社の航海表を見たのに、船によつてはバルボア寄航を掲げてない、サンタアナの表には掲げてあつた。船中で更に念を押したところ、確かに寄港——停船——すると答へた。停船は十分か十五分位のものだつた。

勇躍、上陸して税關に入つた。一緒に上つた人達も荷を解きつゝある、著者も解いた。若い税關吏が四つのシートケース、一の乞食袋、一の藥籠を丹念に一品宛調べる。藥籠には道中自用の内用藥、注射藥、消毒藥が詰め込んである。中に〇〇がある。祕露の名産であり、南米唯一の藥草栽培〇〇君

關係の記念でもあり、大學藥學教室へのお土産でもある。里馬市で野々宮君が之と共に他に八品の珍藥を整へて呉れたけれども、餘り荷になるから、中で、尤も記念と思はれる學術標本だけは、身分、目的、その他の辯明が出来るから、携帶して途々の安宅關で、膽試しの種にし、他の物は心配なさうだから、邦船で送つて貰ふ事にして残したのであつた。税關吏はラテン語に氣がつかぬのか、皆見ながら何うもしなかつた。英語を話す白人だから米人に相違ない。南雲君は、先日税關吏が替り、あの男はバナマ人で米人ではない、便宜な手續などして呉れぬ男だと云ふ。最後に著者のパスポートを見て、検査せぬでもよかつたのと言つた。實は、一番最初に彼にパスポートを提示した時は、知らぬ顔をしてゐたのであつた。

バナマ、否、カナルゾンの米地バルボアに上つて喜んだが、税關を受ける頃から氣温が上り、殊に濕氣が強、取出した品物は元へ納めるのに容易ぢやない。流汗淋漓、癢に障り、がっかり氣拔けの態で、かねて聞き及ぶカナルゾン經營(官營)のチボリー・ホテルに急ぐ。

ホテルはバルボアに在り、小高い丘の中腹に位し、木造ではあるが熱帯に適應した建築で、室廣く天井は甚だ高く、庇長く、風透しよく、室内は暗かつた。服棚を開くと下方に不思議な金網を被せた電燈があつた。服の濕氣を防ぐため温度を與へるのだと言ふ。沐浴して汗を流し、着更へて車を呼び日本領事館へ敬意を表しに行く。ホテルの玄関から百米程下つた路面の、半幅は雜草もなく清掃さ

れ、半は不思議にも清掃せずに残されてゐる。南雲君は、あとの半分はバナマ領で、凡て米領のやうには行届かないのだと説明された。木造家屋の多い町のそこに支那人の店、日本人の理髪店、その孰にもあまり感心出来ない店構へを見る。家の稀な郊外に出ると、清楚なバンガローの點在した區域であつた。

ベラ・ヴィスタの佳景街にある此處の領事館は、廣くはないが、氣分のいゝ建物である。表は領事館、裏は事務室である。副領事に面會する。領事は一日本移民の家庭的なトラブルに就き説論中だと云つた。

里馬滯在中、バナマの議會が東洋人入國禁止法を通過し、大統領も署名したと聞き、此處でその詳細の顛末を聞いた。この國は一院制度で、最初のその決議は大統領が署名を拒否したが、續いて再度法案が可決されたので大統領の希望も通らなかつた由。現在在留邦人は二百名、バナマ市街中に日本人の理髪業者が二十軒許あると云ふ。漁夫が八名居り、極めて勇敢で、土地の漁夫は出漁しても時化になると獲物がなくても引上げるが、日本漁夫は獲物があるまで歸へらない。お蔭で、バナマでは時化の日でも魚が得られると云ふ。

此處では防蚊規則が勵行せられ、花生けの類まで毎日巡檢があり、換水を怠つて子を發見されたりすると罰金を科される。領事館區域は未だ建物が少く、風通しよく住居には理想的らしかつた。午

後、衛生長官に交渉して見學の便を計つて下さるとの事、著者はサンチアゴの米醫ロング氏から長官宛て紹介も受けてゐた。一旦ホテルに歸り、新鮮な料理で午餐を樂しんだ。紐育出程以來半歳、再び冷水の味を賞した。味そのもの外に、生水を飲める衛生的安堵は格別だつた。蓋し南米ではチフス、赤痢が到る處に多いこと、日本同様だからである。サンタアナの船中でも冷水を求めて失望したのであつた。

三時、芝崎氏來訪、衛生長官はロング氏から承知して居たが、今日は差支あつて、明朝八時に役所で面會すると云ふ。然らばと一日は休養することにした。こゝの不快な熱さは格別だ。アマゾンでも斯んなことは稀だつた。アマゾンでは汗は出ても疲勞は感じなかつた。此處はどうしたことか、空氣が全く飽和状態にあるといふのか、その苦熱はこの旅行中での最大なものであつた。

十一月九日、天氣は晴れて風があつても蒸暑い。八時前、芝崎領事がホテルに來られ、見學の爲め有難く同伴する。

二、衛生事情

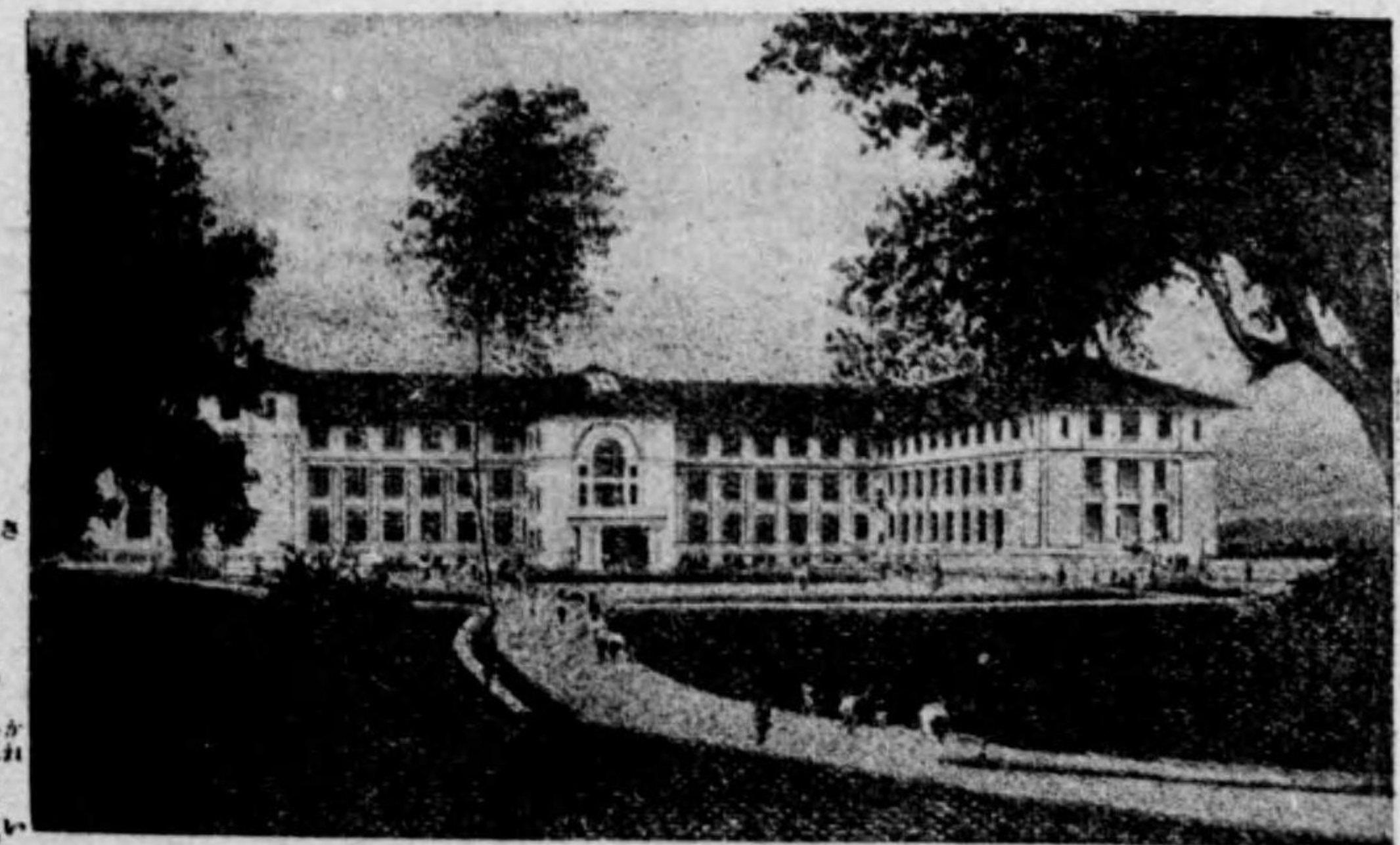
- 運河地帯政廳——チエムパーレン氏——マラリア、チフス、赤痢——文化
- 衛生的官舎——家屋——搾乳所——精神病院——陸軍病院——排水設備——馬糞醱酵装置——アン
- コン病院——バイルス氏——病室——金銀病室——ペーツ氏——日本人の貢獻——塵芥處理——バナ

マ病院——不潔な町

植樹アレー、外來診察所、清楚な官舎地區等の勾配を上り、約十分でバルボア丘上の政廳に着いた。丘上はバルボア及バナマ市を一目の勝地で背後はバナマ灣に臨み、景色絶佳である。政廳は玄關を中央に左右兩翼をもつた四階の大建築で、中央ホールの上の四階のギアレリに、運河開鑿記念のバナマ繪畫が周らされてゐる。

衛生長官コロネル・ダブリユー・ピー・チエンバーレン氏の室は四階左翼の端に近い所で、氏は齡六十を超えた、瘦軀童顔で、言語は悠揚迫らずといつた紳士であつた。著者は、サンチアゴのロング氏の消息を傳へ、見學事項の希望を申し出、バナマに關しては一九一五年版のワトソン氏の“Rural Sanitation in the Tropics”を主として知つてゐるが、以後は如何かと質問し、壁に掲げたコロネル、ゴルガスを指して、彼は醫

馬ナバ市ボルア岡政廳



界の偉人だつたと思ふと云つた。チエンバーレン氏は、如何にも彼はヒーローであると同じだ。氏は又、現在は衛生防疫共餘程進歩した結果、部下の使用人員もよほど縮小した。マラリヤも毎年發生數三百を出でず、チフス赤痢は全滅した。それらに就て、今は爲すべき事はなくなつたと云つた。著者は、感歎して、爲すべき事がなくなつたとは、眞に理想的の状態であると賞揚した。氏は豫め用意してあつた地圖及印刷物を與へられ、地圖に就いて現況を説明し、終に次室の役人を呼んだ。——氏は上衣を着けて居たが、次室も他の室も皆上衣なしで仕事をしてゐた。熱地で働くには體を樂にしなくては能率は舉らない。米人は事務を主とする。後に聯合果物會社船でニュオリンズ迄の航海中も、食堂以外では米人はレデイの前でも上衣なしでゐた。——その人物に著者の希望を傳へ、鉛筆で地圖に見學區域を印して與へた。巡覽する距離は恐らく二十哩程と思はれた。辭去して、右の吏員氏の運轉する役所の車で、約三時間半、諸所を乗廻し、時々下りて説明を聞いた。

官舎の多くは小山の中腹傾斜地に在つた。綺麗なバンガローで日射を防いでゐる。樹木を植ゑて蔭を作り、小庭園を設けて草花を植ゑ、その地は芝生である。間に小形の暗渠、開渠を通じ、傾斜地の排水溝としてゐる。開渠は半圓形のコンクリート溝で、雨水と湧出水の集りで、清澄掬すべきものであつた。一定の勾配を付けて急流させ、蚊の産卵を防ぐ。こゝでは毎月若干の降雨がある。平地の處々に使用人の長屋がある。長屋と言つても床は一間位の高さがあり、廊下、外圍、窓戸な

どは皆金網張である、屁深く、風通しがよささうで、裏手の洗濯物が風にはためくのが見えた。此の邊の下水は暗渠だつた。黒人が大部分で、使用人は目下百五十人と云つた。

デリー搾牛場は、山下の小高い丘にあり、放牧場、厩舎、瓶詰消毒場が附屬してゐる。毎日四百罐宛搾乳配布すると云ふ。

精神病院は小さな木造平屋建を連結したもので、現に一部を解いて漸次コンクリート改造中であると。患者らしい一婦人が頻りに獨語してゐるのを見た。

コラザール病院は兵營附屬の病院で可なり大きく、同様木造であつた。病院の塵芥を處理する小高い丘の上の平地に行つた。そこで、單に火をつけて野天で焼却してゐて、特別の竈などの装置はなかつた。

種々の地勢の變はつた區域の排水法を示された。埋立てられた沼澤の縁に残つた溝の、まだ排水されない所は重油を撒布し、葦に似た草の水面の高さに油

暗 渠 工 事



埋立てられた沼澤の縁に残つた溝の、まだ排水されない所は重油を撒布し、葦に似た草の水面の高さに油

を被むつたのも見た。そこは土壤の固まるのを待つて排水工事を始めるのださうで、かうした箇所は他にも二三あつた。地の固まつた部分は、コンクリートの土管を埋設してゐた。恰も乾燥期の初め、排水工事はこれから進捗するので、雨期には屋外工事は困難だと云ふ。

凡そ百坪許の、トタン屋根掘立て小屋の土管製造所、と言ふのを見た。コンクリート土管の、徑四五寸の小形のものから、徑二尺程のものまで、半圓型のものもあつて、屋外に堆高く積まれてゐる。近くに工事事務所があつた。

土 管 製 造 所



毎日市内の馬糞を集めた車は、上の唄から鐵窓を開いて馬糞を投入し、充滿密閉して、十四日間放



アグンマは樹舎酵酸然自糞馬

置される。その間に馬糞は酸酵し盡して、蠅も産卵しなくなる。説明された。恰も一區の入口が開いて、中から濃々と煙が出てゐる。近よつて窺へば黒人が一人、上半身裸體で熊手様のもので馬糞を掻き出してゐる。全身に汗が瀧の様に流れてとても熱さうだつた。こゝではこれを smoke fermentation と言つた。酸酵した後の馬糞は支那人が買受けて肥料に供給する。政廳の下方に戻ると、外來診察所があつてコンクリート平屋建の美事な建物で、受診者で賑つてゐた。午前見學の終に、有名なアンコン・ホスピタルを訪ふ。バルボア高地の政廳と谿を隔てた山の半腹にあり、昔、佛人が運河開鑿時代に、病院を設けた土地だと言ふ。舊病院は跡形もなく、新築された數層數翼の大病院である。谿間の適地には官舎があり、住心地が良さ

さうに思はれて羨しかつた。

院長 ダブリユー・バイルス氏は六十歳位、相當肥満した氣の早さうな人物で、長官からの電話で、案内して呉れた。氏は外科専門なさうだが、著者の専門を問ひ、且つ視察の程度の希望を質した上、各科を適當な程度に説明されたには敬服した。各室とも便利清潔で、患者には充分廣い面積が宛てがはれてゐた。但し、白人室と黒人室とはそれぞれ區別され、前者はゴールド、後者はシルヴァーと呼ばれてゐたのは一奇であつた。本病院は米國が佛人から承繼し、一九〇三年十二月開院し、當時の病院長ドクター・ハリクス氏が所管した。同氏は現在はバナマ市内バナマ病院長である。當時は疫癘(黃熱、マラリヤ)猖獗の際であつたと云ふ。

研究室は別棟の三階建で、研究室長ベーツ氏に紹介された。研究室は細菌、化學、及病理の三部に分れ、設備は相當完備してゐたが、目星しい新研究は見なかつた。面白く見たのは流石に石油をふんだんに使用出来る米領のこととて、病理室附屬の屍體燒却室は、初め電氣爐かと思つたが、電氣で點火して石油で燃焼する装置だと説明された。ベーツ氏は芝崎領事を顧みつゝ、吾々は日本に感謝する、日本汽船の患者で入院死亡した場合、領事の斡旋で屢々解剖させて頂くのであると語つた。屍體冷蔵装置も完備してゐた。この病院へは屢々遠くコロンビアの首府ボゴタ市邊からも富裕の患者が飛行機で來て入院すると云ふ。

ホテルに歸り領事と共に午食し、約束した衛生長官からの自動車で二時更に見學に出る。

塵芥棄場。パナマ共和国国内のパナマ市郊外の海濱に沿つた地域が、順次、絶えず塵芥で埋立てられてゐる。埋立てられて数年を経た部分は、土地が沈下して、今埋立てつゝある處よりは十數尺低く、表面には雑草が生えてゐる。少し新しい部分は醗酵の煙を發してゐる。今埋めつゝある處は、すぐその海濱へと塵芥を馬車で運んで来て、埋めた端から傾斜崖に移乗する。その上から赤粘土を被せ、そして、すぐその上に重油を撒くのである。其方法は珍らしかつた。

重油は遙か遠くのバルボアの大タンクから鐵管で導いてゐるさうだが、埋立地の傍に粗末な器械場があり、鐵罐が見え、これを下から火力で温めてゐる。

人が背中に負へるだけの大きさの、ランドセル型の金屬製の重油函に、小ポンプが付けてあるのを黒人が負ふ。試みに函に手をあて、見たら随分熱い。背中との間に一寸許の空氣層があるので、どうか我慢が出来ない。それでも汗だくで、右の手で時々ポンプを押して空氣を壓搾し、次に背中の函から出てゐる管の括縁を捻つて、重油を六七米突先まで噴出せしめつゝ、新投下塵芥に被油する。それが済むと、他の者が粘土を被覆する。埋立てて年久しくなつた處には已に建造物が出来てゐる。英吉利公使館（日本は漸く領事館を設けてゐる）は、已に立派になつた埋立地に廣々と立派に建てられてゐる。

此の重油撒布は蠅を防ぐためである。撒油夫の恰好は前述の如く類のない振つたものである。埋立作業地はまだ塵だらけ、油だらけで、臭くておまけに熱い。雨が降る時には水溜りが出来て汚い。古い埋立地で、といつても二十年にはならぬ筈であるが、既に利用せられてゐる區域を自動車で廻つた。廣い區域の様に思はれた。

まだ使用してゐる古い方の馬糞醗酵窟はかなり遠かつた。前の塵芥埋立地から古い埋立地區を通り過ぎ、所々に樹林もある自然の平地の區域で、そこに二米に六米位の長方形、深さ三米位のコンクリート窟が八個あつた。二つばかり残して他は殆んど地面に近く迄埋められ、表面に粘土を被うてゐた。今も持つて来た馬糞に一人の使用人が粘土を掛けてゐた。此の装置では、埋めて四ヶ月たゝぬと醗酵が完全に出来ぬといふ。前に記した装置は裏の一方は土壤の崖で、他の三方は皆地上に建てられたコンクリート長屋で、日射をよく受け、内部も高温になる。この古い方は地中の装置だから其の點が違ふかと思ふ。

パナマ病院。即ち共和国パナマ市の病院は郊外新開地域に位し、市内と異り狭く汚い場所ではなくて、附近には綺麗な住宅や空地がある。病院の敷地も廣く、花卉を植ゑた庭もある。木造であつて、先のアンコン病院の宏壯には比すべくもないが綺麗で棟数も數多ある。退廳時だつたので、外部だけ瞥見した。アンコン病院第一期の院長ハリクス氏は米人だが、ここの院長を勤めてゐる。

パナマ市は西班牙流の建て方で、通りが狭く下水なども汚かつたさうだ。通りは舊態のままの所が多いが、新しく広い街も少しはあつた。今でも矢張り何となく汚い、臭い所も有る。大通りは人の往来はなかく、多いが、店の立派なものはない。日用品市場は時刻がおそくて、掃除してゐた。大きい下はたたきの粗末な建物だつた。食用鳥が色々あつたが、肉棚などに蠅が澤山ゐて、天井は張らずに、屋根から蠅取用の鶴短冊を澤山吊下げてゐた。但しこれは毎日取換へるとは云つてゐた。成程、さう澤山はくつついてゐなかつた。

パナマ市は貧乏で衛生費が少い。米國のカナール・ゾーンでやるだけの事が出来ない、と言つて米國の方では接壤の地だからたまらない。初めはパナマ市の衛生實施を監督するに止つてゐたが、近頃は名義はとにかく、實施は米國で受け持つことになつたさうである。

三、太平洋から大西洋へ 室の註文——チボリホテル防火装置——一時間四十五分——ク リストパールの一夜——見たい物は皆見た

夕五時少し前にホテルに歸着。熱い苦しい日であつたが珍らしさに大車輪で見學した。實は二日に分けて見た方がよいのであつたが、明十日にニュオリンズ行の船が出る、八日に船室をリザーヴしておいた、夫に乗らねば又數日おくれる。それ程見る物も無い場所だし、廿三日の天洋丸に間に合はね

ばならない。今日日あれば船で運河を通過して見たかつたのであるが。荷物を支度してホテルの勘定場に行つた。クリストパールへ行くと云ふと、室を註文してやらうと、電話で紹介して呉れ、承知の旨返事があつた。

チボリホテルの大食堂の天井に、鐵管が縦横に走つてゐた。空氣冷却装置かと思つたが、さにあらず、木造家屋なるがための防火用の水管であつた。食堂も心地よく出来てゐる。ダンシング・ホールや女關、ホールや女關側の廻廊など南國向に出来てゐる。ダンシング・ホールではこの熱さにもかゝらず、勇敢に踊つてゐる一組が見えた。帳場傍の賣場は便利で、サーヴィスも満足。名残惜しいホテルであつた。

荷物はホテルに托し、匆々に支拂して自動車五分のパナマ驛に著いた。かなり立派な驛だ。列車は南國向の構造で心地が良い。ブルマンカーの一席を得、荷物はボーイが車の出入口に置くと言つた。領事と南雲君が柵外で見送られる。挨拶に下りて行くと、領事は、途中運河の状況は夜中でも左側に見えるからと注意して呉れた。六時十分發車。

カナールゾンの役員らしい人も同車してゐたが、途中で下りた。カナールには時々隠現する貯水地などはよく見えた。向ふ岸の電燈や、其處から狭くなるカナール口の建物は立派である。町らしい處にある驛は相當だが、野原の一軒屋といつた風もある。肝腎なカットの處がよく見え難かつた。陰

曆五日、をりをり雲があつた。



ルテホントンシワのルーパトスリク

一時間四十五分に、四十八哩餘を走つて七時五十五分にコロソ驛に著いた。僅か二時間足らずで太平洋から大西洋へだ。

コロソ驛はバナマ驛よりは賑かたで立派に見えた。汽車が著くと南米諸地と同じくがやくと荷擔夫が来る。小雨の中でアウトの競合ひだつた。幸に英語が完全に通用するから何の苦もない。豫て聞いたワシントン・ホテルまで車賃五十仙。

五分許り賑かな町、バナマよりは立派な店並の通りを抜けて静かなホテル前へ来た。

このホテルはすぐ海岸に建つてゐる。裏の芝生の中央に、彼の有名な悪鬼を脚下に踏んだコロソブス・クリストバルの像が見える。その先は石で疊み上げた低い壁で

海と界してゐる。二階の一室をとつた。大きい窓の窓框の外に金網が張つてある。海風徐ろに來つて涼味掬すべしだが、荷物の取形付などに、少し身動するとすぐ汗が出る。お湯を使ふと疲勞が一時に發して食堂へ出る勇氣を失つてしまひ、室で軽い食物を取る。

二階建て石造かコンクリート建築である。天井はチボリホテルよりずつと低い。しかし廊下にも風抜があつて吹き通して涼しい。場所が大西洋岸だからか、何處となく華やかな気分があり、サーヴィスにもそれが感じられる。客は無論米人が主らしい。隣客に夫婦らしい立派な支那人が居て、九時過ぎに英國領事館へ電話をかけてゐるが、容易に通じないと見え、大聲で支那の何某と幾度も名乗つてゐるのが聴えた。

今日で、本國出發以來見度いと望んでゐた事を、健康で故障なく見終つた。これからは眞の歸路。明日は愈々中米の土を離れて、再び大西洋の船の上かと、安堵してベッドに横はる。

序ながらバルボアもバナマもクリストバルもコロソも、みなバナマ何々と云ふけれど、現地では使ひ分けられぬ。バナマ共和国のバナマ及コロソ、米國の運河地帯のバルボア及クリストバルと。又運河は全く南北に通じてゐて、南口はバナマ、北口はコロソと！

第十六章 パナマより北米ニュオリンズまでの船路

※クリストバルよりハバナ迄九七八哩、ハバナよりニュオリンズまで五九七哩。

- 一、バナナの船 コロンの町——聯合果物會社船——港外佳景——話し相手——上衣を脱いで
- バナナ熱れる——無電技師——解禁の船——ハバナ港——葉巻買入——人世到處——謎の贈物
- 着港遅れて見物不能——繁昌のメキシコ灣——船揺れる——海水變色——鄭寧な電文——
- 河口——平凡な兩岸——今は昔ミシシッピイ情緒——檢疫——夜半の入港

クリストバルから北米へは色々の船があるらしいが、已にバナマ市で北米聯合果物會社のパリスミナ丸の切符を買った。この船はニュオリンズ港迄の途中、唯キユバ島のハバナ港に寄港するだけで早く北米に歸られる。同じ社の船でも墨國の港やその他に寄港し、十日もかゝつてニュオリンズに著く。十二日かに出るのがそれであつた。サンタアナ丸で同船したシカゴの動物學者はそれに乗ると云つてゐた。

今日十一日、午前十時乗込み十一時出帆と云ふ事であつたから、朝のつくり起きようと思つてゐたのに、六時前から幾つも飛行機が低空を盛んに翔けるので、ゆつくり寢られなかつた。ボアではそんなに多く飛ばなかつた。地形から察するに、この邊に飛行場があるらしい。

此の朝一寸雨が降つた。ホテルの裏の芝生の端に低い石垣がある。外は道路で、道路はすぐ海に沿うてゐる。昨夜おそく迄時々人聲がして何か知らんと思つてゐた、今朝早くから又人が通つてゐた。一昨日、バルボア上陸以來久々にいゝ材料の食事に有り付いた。朝のグレープフルーツは熱帯では殊にいゝ。オレンジよりは朝にはふさはしく思つた。朝風呂を浴び、室内でグレープフルーツ、パン、バター、珈琲で朝食を済ませた。一番氣に入つた朝食だつた。

昨日は非常に面白かつたが忙がしくもあつた。今日は船に乗るだけだから何となく落着いてゐられる。荷物はホテルの言ふ儘に早く船に送らせたが便利でよかつた。九時半に出る。玄關の前の庭は廣く、熱帯樹が配置よく植ゑてある。これも氣に入つた。町に出るとバナマよりは道も廣く、整然としてゐる。埠頭の廣場までホテルから七分。上屋から手提一つを携へて船に上つた。

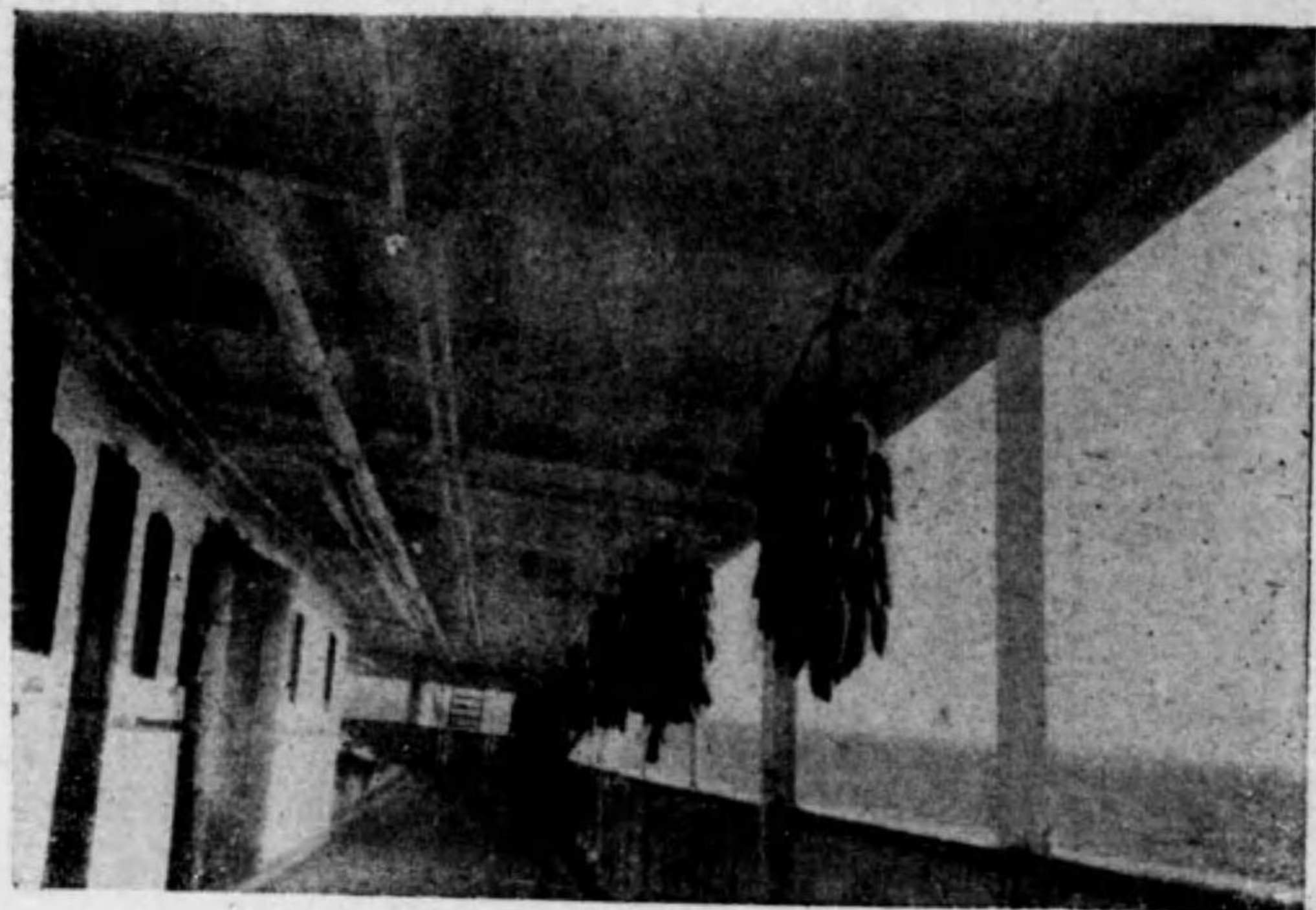
船は今、前後のハッチにバナナ積取りの活動中である。船室に荷物が間違なく入れてあつた。閉じてあるから熱くてたまらない、甲板へ出てバナナ積を見る。此の船は客室は一等と、特等が二つだけである。應接室と浴室が付いてゐる。今頃は客はあまり多くない。クリスマス頃には多いさうだ。船體の構造は少し他の船と異ふ、バナナ専門の船ださうだから。後のハッチには上屋から妙な梯子付のバナナ搬入器が掛けられ、甲板上の小さい蒸気機關でもつて、此の梯子、小さい船形のバナナ入れが澤山付いてゐるのを廻轉させる。上屋内で黒人が船形の容器にバナナを一ふさ宛入れる。それを甲板

で、下のハッチに移るようになってゐる。ぐる／＼次から次へとバナナが上つて来る。機械の運轉が騒々しい。前部ハッチの處には上屋から橋が掛けてあつて、黒人が三尺距位に立つて、手から手に、一房づつのバナナを搬入してゐる。その方でもガヤ／＼人の聲が聞える。時々渡し損ねて笑聲が起つたり、日本で炭で石炭を運ぶ程に敏捷ではない。も少し、ヨイヤコラとかエンヤラホイとでも調子付けたらよからうになどと思ふ。

バナナの他は何も積まなかつた。バナナ積が容易に終らない。出帆時間十一時も過ぎたが平氣でやつてゐる。隣のドックにゐた英船は出てしまつた。仕方なしに甲板をあちらこちら遣遙して時を送つたが熱かつた。漸く一時間前にバナナ積込が済んだ。後部ハッチの機械梯子を下すのが容易でなく、おろし方が下手で可笑い見物であつた。

午後一時に(中米時間が今日からハバナ時間になつて一時間おくらした)船が動き出した。見廻すところ、ドックは数少いらしい。狭い所を暫く通つて、漸く稍廣い水に出て、ものゝ二十分もかゝつて外海に出た。急に船が活潑に動き出す。風もあつて涼しくなつた。三時間許の苦みが急に去つて嬉しくなる。

青いバナナがプロメナード・デッキの外側に吊下げられた。一房を持ち上げて見たがとても上らな。黒人が積込の時唯一房宛運ぶわけがわかつた。バナナは三種あつた。大きく青いのと、中位で赤



ナ ナ バ の キ ッ デ

皮のと、小夥で青いのと、そして一房に八十本から百三四十本宛宛着いてゐた。

すぐ午食が始まつた。食堂は今迄に乗つた船の内、紐育からベレーム迄のデニス號の倍位で、他の船のよりは小さい。けれども明るく設備も良い、客が少なくて食卓の五分の一位しか塞がらなかつた。

窓側の中央の卓を一人で占領してゐた。ボーイは黒人、食堂長は米人であつた。サーヴィスも良い。此の食堂では食物の品名を口頭でなく一々書かせること度汽車の中のやうで、今迄の船と異つてゐる。面倒だけれども其方がよい。食堂長の云ふには間違を起さぬ爲めだ。出口の所に小楊子と二品ばかりの菓子が置いてあるので、甘黨だから食事が済んで出がけにはいつもそれを撮んで行つた。此の船の珈琲も先づ美味かつた。

食後甲板に出る。涼風が袂を拂ひ、クリストパール

港の出口は美しくかつた。島はないけれど椰子の樹間に赤瓦の屋根が並立して、遠近の山々を背にした平坦な町の景色は明媚である。波は穏かで船は動揺しない。午後三時頃迄山が見えたが、それから一望何もない大海原をひた進む。

十一月十一日、木曜日、航海第二日。昨日に引続き午前中海上平穩であつたお蔭で、一昨日の疲れは全く忘れることが出来た。船は一時間十三哩位の速度で、正午には、コロンから三百七哩を進んで居た。デニース丸の事を思へば難有い。食堂のボーイは頭のいゝ男で、好きな食物を一日で覚えてしまつた。言ひ付けなくても、ちゃんと支度して持つて来て顔見合せて互に微笑んだ。午後になつて曇り、遂に風雨となり、夜に入つてから船は動揺が激しくなつた。夜八時頃西方に二つの島が見えた。地圖で恐らくオールド・プロビデンス・アイランドらしい見當だつた。

特別船室に七十歳位の上品な老夫婦の船客がゐた。著者は一等であるが、廊下でよく出會ふので話しが始る。北米の金持で、遊覽旅行であると聞いたが、おばあさんの言葉は鼻にかゝるので解り兼ねて困つた。四十五六に見える年増の綺麗な婦人船客と知合になつた。夫は運河地帯の官吏で、單獨で北米に歸る途中で、一年に一度は歸國しないと健康によくはない、他にも其んな人が多く、クリスマス頃又やつて来る豫定で、廿四歳になる一人息子は本國飛行隊の士官であると言つてゐた。そして娘時

代に一度日本に行つて、長崎、京都、東京や日光を遊覽したことがあると話してゐた。

他に獨逸の商人が居た。漢堡の人で、三年に一度南米を廻ると言つてゐた。なか／＼面白い男で、著者よりも少し前にリオ・デ・ジャネロにゐて、一日本婦人と同居してゐた、人は何が楽しみで生きてゐるか、人は何處でもホームが必要である。人世到處青山あり等と語つてゐた。

船上、暑いので、婦人が居ても食堂での外は男子は上衣を脱いでゐるのには驚いた。著者と此の獨逸人とは上着を着通したが、他の船では見ることの出来なかつた圖である。實際暑いので、實は脱ぎたかつた。

十一月十二日、航海第三日。船は今日も動揺する。海上には何物の影も見えない。昨正午から、今日正午迄に、漸つと、二百六十四哩しか走つてゐない。ハバナ著が遅れねばいゝがと心配する。今日は幸に稍々涼しく、汗が出なくなつた。併し夏服で、チョッキ及下シャツなしである。珍らしく食欲が減じた。

十一月十三日、土曜日、航海第四日。風に逆つて針路をとつてゐるので、船は依然動揺する。四十九日行程前、ハバナに數十年來の大風が吹いて、家が倒壊し、死傷者を出したといひ、此頃は近海は常に

荒れるさうである。今もその餘波を受けてゐるのである。コロン出帆の時は、今日の午後三時にハバナに著く豫定で、案内記を頼りに市内見物、殊に島を少々ドライブして見る積りであつた。正午過ぎ、一寸晴れたが、すぐ曇つた。風が強くなつて船は益々揺れる。字も書けない位である。社交室も寂しい。豫定時刻はとうに過ぎて日は徐々に暮れてゆく、ハバナ見物はオヂャンになりさうである。四日前クリストバル出帆の時、散歩デツキに吊下げられたバナ、が、そろ／＼黄ばみ出した。剽軽な五十位の米人が散歩の序に、甘さうな奴を取つて食べ出した。数日の間に、あちこちの房に噂が出来て来た。著者は食堂で食べるが思つた程美味くはなかつた。一昨日、船室の戸扉の下から印刷物が差込んであつた。見れば、無線電信を利用せよと、船の電信局の勧誘であつたので、ニューオリンスに著く前に一度発信し度いと思ひ、無電室を訪れた。

甚だ快活な壯年の技師二名で、米人流にフランクではあるが親切であつた。それ以來遊びに來いと言ふので寂しくなつた折、屢々遊びに行つた。この無電局は晩にはラヂオで音楽を聞くことが出来る。航路の周圍に何ヶ所も放送局があるさうで、夫を地圖を披けて説明して呉れた。若いレディ達も晩には局に遊びに來る。ラヂオを聞いてゐる間に無電がかゝつて來ると技師先生は大變だ。隣の電機室へ飛び込んで、大車輪でスイッチしたり波長を合せたりする。夫が濟むと又ラヂオで賑になる。著者一人の時は、禁液を呉れたりする。技師は一度日本に來た事があり、内地は餘り旅行しなかつた

が、諸港と東京は知つて居た。その上、ニューオリンスの日本領事を知つて居つたり、さうした理由で一層親切にして呉れて大層愉快であつた。この船も禁酒法施行の當初には、ドライであつたが、外國客が漸次乗らなくなつたので、遂にウエツトになつたと云ふ。

閑話休題、日は傾くがハバナに著かない。好物葉巻の都、甘黨の原料産地のキューバ島首府の見物は愈々駄目らしい。午後六時頃から、鳥蔭に入つた爲めか、船の揺は大分収まつた。右舷に燈臺の光が見える。北緯二十三度、未だ熱帯とて日足は早い。船は針路を東にとる。ハバナに近付いたのであらう。

午後八時頃にハバナの燈臺の光が見え、そして、そこと思はれる空が明る見えた。九時、港の入口に著いた。入口は狭いらしい。船は入口の狭い長い港に入る時は徐行する。右手は町で、海岸の道路をアウトが盛んに走つてゐる。立派な建物が見え出した。ホテルらしいのも見える。般んな都會らしいが、熱帯病中の白眉、黄熱病の巢窟であつた昔を思ひ出して慄然とする。

船は港の奥の左の岸壁に著いた。既に十時、一時間後に出帆すると言ふ。計畫して居た数時間のドライブ、日本人會長訪問も駄目になつた。舷梯が下された。下には南米と同様に、無数の見物や勞働者が群集してゐた。ハバナに於ける最小限度の希望である葉巻を買ふ爲めに下船する。バナマで、芝崎領事から、前任三年間（ハバナを廢館してバナマに設館した）のハバナで、自然に、葉巻の研究を

せられた話を聞いてゐたので、何會社の何と言ふのが良いといふ事を知つて居た。短時間で、よく撰
擇も出来なかつたが、日本で買ふ事を思へば安いし、且つメツタに見當らないのが得られた。買った
葉巻を見た前記の米夫人が、飛行隊士官である息が好きだから買つてやらうと言つて直ぐ出掛けた。
毎年往復し乍ら知らないのは燈臺下暗しで可笑かつたが、直ぐ買ひに出掛けて行つた母親らしい優し
さには感じ入つた。十数名の上陸客があつたが乗込む者はない。心易くした獨逸商人は此處で下船し
た。彼氏は、此處にも自分を待つて居るホームがあると云ひ、來年は東洋に行くと言つて居た。
無電技師エス君が、著者に或る物を寄こす人があるから宜敷く受取つておいて呉れと言つた。船の
出る少し前にボーイが舷梯の下で呼ぶ者があると云ふから赴つた。一人の若者が紙に包んだ重い荷物
を持つて來てゐた。何だか知らぬが受取つて直ぐ船室へ入れて戸の錠を下しておいた。船が出帆して
から少し後、船のボーイが、バケツトを持つて室に來て、その品を入れて往つた。出帆は十一時過ぎ
であつた。

十一月十四日、日曜日、航海第五日。汗は出ないが蒸暑い日だ。午後は追風であつたが晩方から逆
風に變つて船が揺れ出した。此の邊はメキシコ灣内で、東西南北に航行する船が多い。五艘行き交つ
た。海藻が澤山流れてゐる。晩に無電室へ遊びに往つた。紐育のラヂオが聞かれて賑かであつた。

無電技師エス君の例の荷物は一體何んであつたか遂に聞きはしなかつたが、先生左利きだから、先づ
以心傳心で、略々見當はつた。コロンからはハバナ時間であつたが、今日から丁度一時間戻して、
アメリカ時間となつた。此船でもグレース會社のサンタアナ丸でも、晚餐に服を著換へないので甚だ
らくであつた。

十一月十五日、月曜日、航海第六日。朝から船は動揺する。夜中には揺れてもよく睡られるが、日
中揺れると思ふやう運動も出来ず、自然に體が弱る。コロン出帆の時の豫定によれば、今日、午後三
時頃にニューオリンスに著く筈であつたが、愈々遅れて大分おそくなるらしい。船は北に進んでゐる。
午後二時半海水が褐色に變つて來た。大陸第一の長流ミシシッピの爲めである。船の揺れも減じ、
氣温も少し涼しくなつた。そして、何んとなく氣が軽くなつて來た。アマゾン河口でも海水が變色し
たが、河口まではまだなかく遠かつた。

三時に無電室に往つて著港の時間を聞き。ニューオリンス領事館へ、今夜夜中に著く、明晩ロサンゼ
ルス行のラワー・セクションのリザーヴを願ふ旨を記したら、エス君は、もつと長く書け、自分が打
つから構ふ事はないと言ふ。妙だなと思ふ。別に書く事もないので、鄭重な、長つたらしい句に改め
て打つて呉れる様に頼んだ。エス君は、無電局は會社のもので、日本船の官設とは違ふから、いくら

打電してもかまはないのだと。旅行中、随分外人の親切を受けたが、無電技師と懇意になつたのは此の船が初めてであつた。

五時河口に着いた。海水の變色を見初めてから航走二時間半だから、河水は河口から約三十五哩位しか海中に出てないわけである。尤も今は河水の少ない季節かも知れないが、アマゾン河では前日に海水の變色を知つた。此處の河口は案外狭くて、兩岸を見渡せる。此の河は、少時、英語讀本で讀み習つてゐて、一度見たいものであると望んでゐた。兩岸は平坦であり、風景も取立て、記す程の事もない。昔時、鐵道交通の乏しい時代には、大切な交通大動脈として、船の往來も繁く、港々は、恰も東海道五十三次とも云ふべく、ミシシッピー情緒と云つた一種の趣があり、或は紀行文に、或は小説に描寫せられ、自然吾々にも概念されてゐたので、色々思ひ出を辿りつゝ眺めてゐた。

河口の處で、水先案内が乗り込んだ。此處からニュオリンスまで百哩許りあると云ふ。徐行するの随分おくれる事だらう。日はすつかり暮れ果て、陸に燈臺が見える。處々にタウンらしいものが見えるが、兩岸は寂しい。晩の八時に、ちよつとした町に着いた。他にも大きな船が碇泊してゐる。此處に檢疫所があつて、ドクターが上船して来て甲板で望診した。

船は又靜かに暗のミシシッピーを溯る。大變涼しくなつて、バナマ着の前夜から八日目、又冬服を着ることになつた。九時頃、無電室に行つて眠くなる迄ニュオリンスのラヂオを聴く。

第十七章 ニュオリンスより横濱まで

- 一、横斷鐵道と天洋丸 牡蠣料理——まにら丸のムスト——船醫の機宜——天洋丸出帆延期——一時間前に乗込める列車——棉花の平野——サン・アントニオ驛の尾行——エルパソ驛の移民官——デザート——高地療養所——果物冷蔵列車——ロサンセルス——氷水痛飲——再會と新知己——桑港の舊知己——ハロイ——荒れ通す

十一月十六日。午前三時半停船、漸くニュオリンスに着いたので、六時の夜明けまで寝てゐた。起きて沐浴しようと思つたが、水が濁つて居るので中止。ドクターや、税關吏が來たが、簡單に見廻しただけであつた。

散歩甲板に出て見た。岸壁に左舷を横着けしてゐる。目下の大きな建物は果物會社の倉庫ださうだ。港は何んとなく靜かで、澤山の擔荷夫等がガヤ／＼來ないなど、確かに米國に歸つて來た心地がする。西洋人が日本人か、色別出來ない白哲の一紳士が下を逍遙してゐた。

七時半、領事が上船せられた。早朝で甚だ恐縮した。八時に上陸。直ぐ近くの建物にある税關へ行つた。シートケースは皆開けたが、一つ丈けを能く検査した。葉巻二十五本入り四函の紙包を見せたがオーライと云つた。そして、領事の御案内で直ぐ領事館に出頭した。二階建の木造で、郊外近い

住宅區にあり、館の周圍には可なり大きい樹木の庭園があつた。領事の御好意で用達も濟せ、見物もし、大變御厄介になつた。北大陸の南方の州、舊の佛蘭西植民地の都の氣分を可成りよく吞込むことが出来た。

此處で變つた事は、牡蠣の御馳走になつた事と、邦船のベスト災難である。

領事は、晚餐に名物の牡蠣料理を御馳走しようと言はれる。著者は紐育の牡蠣チフス傳染説を話して、此處の養殖法をお尋ねした所、此處では、下流地方の處々の湖で養殖せられ、紐育の如き汚水に浸る事がないから安全であると言はれた。安心してお相伴した。繁華な表通りに程遠からぬレストラン・ルイヂアナといふ所。大食堂もあつたが、一同は別室であつた。平鍋一面に、食鹽を敷いて、其の上に牡蠣を五、六顆ばかり載せて焼いた。日本趣味で、大變に美味かつた。他に鳥料理等もあつたがそれも大層美味で、華盛頓からボストン迄に出會つたそれらとは味覺が違つて、佛蘭西風であつた。ドライでなければ、牡蠣で一酒杯といふ處。

南米東海岸には時々ベストがある。十月一日に、伯國サントス港で、アルゼンチンの伊藤農學博士をマニラ丸に訪うた事があつた。今日、領事館の事務室でマニラ丸の船長と紐育支店の社員とに會つた。マニラ丸は、ブエノス・アイレスから諸港を経て、十月廿四日に此處に著いた。着港の前々日に水夫長と油差の二人がベストに罹つて發病した。ブエノスにも、サントスにも、マニラ丸の著く前に

ベスト病があつたのである。船で早く診斷が付いてゐたので、その事を米國檢疫所に報知した。北米當局は船の當事者の處置の敏活であつた事を賞めたさうである。

領事館で大變厄介になり、入院させたが、一人は十日前に不幸にも死亡し、一人は、既に恢復期になつてゐた。著者は我マニラ丸の船醫池田正君の處置が適切であつた事を、殊に此處で聞いて大に心強く感じた。此處の檢疫では、船を檢疫所に廻し、船を明けて消毒する事は出来ない。荷物は河の中、傳馬に移して消毒し、又驅鼠法を行ふ。夫でも未だ捕り切れないので、紐育の檢疫所から鼠捕の専門家が派遣されて船を檢査したが、此處に未だ居ると其の人が指す所には屹度鼠が居た。紐育支店では大に心配して、態々會社の人を一人よこしたのだと聞いて大いに氣の毒に思つた。職掌柄、見舞に出掛け度いのであるが、船はミシシッピー河の下流の檢疫所に假泊してゐるので直ぐには行けないとの事であつた。

三月東京から一緒にアマゾンに往つた一行中の水村君が、恰もマニラ丸に乗つてゐて、此のベスト難に出會つたと歸朝後聞いた。マニラ丸を尋ねたら會へたのであつたが奇縁である。

此處で紐育刊行の邦字新聞で、天洋丸は、横濱出帆の砌に坐洲して、出帆が一週間遅れ、従つて歸航の桑港出帆二十三日の豫定が二十六日になるとの記事を見た。三日だけ餘裕が出来て、ロサンゼルスでも、桑港でも、一息つけるわけであるから大いに助かつた。

初め、ニュオリンスに著いたら、先づホテルを取つてからと、パリスミナ丸で、聯合果物會社の出す月刊繪入雜誌の廣告を物色して、その一つにきめてゐた。ロサンゼルスでも、夫れによつてホテル・ビルチモアに泊らうと決めてゐたのが、こゝでは領事の御蔭でホテルの必要が無くなつて仕舞つたのであるが、聞けば、此の果物會社と夫等のホテルとは、或る關係があつて推薦してゐるのださうである。ニュオリンスのホテルは餘り良くは無いが、ビルチモアのは良いホテルださうだ。

此處から、歸途に取つた道順、即ち、南太平洋鐵道でロサンゼルスに出て、ロサンゼルスから海岸線の晝間列車で桑港に歸る行程は邦人旅行者の馴染の所故、詳記しない。

ニュオリンスを出發したのは十六日の夜の十一時であつた。驛では、十時から寢臺を使はせるので早く乗つて就寢した。此の頃は旅行者の少ない季節である。座席も大層空いてゐた。

ロサンゼルス迄に二度時刻が變る。十八日午前十一時にエルバソ(テキサス州)でマウンテン時刻になり、十九日朝七時廿三分ユーマ(アリゾナ州)で太平洋時刻になり、各々一時間遅れる。ロサンゼルスへは四日目の十九日午前十時二十五分に著いたが、汽車表の上では五十九時間許りになるが、實は六十一時間なわけである。

ニュオリンスからロサンゼルス迄二〇〇八哩、時速約三十三哩位である。

ブラジルを旅行して棉には自然興味を持ち、加ふるに同行の福原君から詳しく教はつてゐたので、此の北米の棉花地帯を通過に際しても注意してゐた。

十七日朝から、列車はテキサス州をひた走る。山は少しも見えない。耕地整理は關東地方の夫れに似てゐる。久々で松を見る。町はもとより少くなく時々牧場が展開される。草は枯れてゐた。然し、十七日全日と十八日の午前中、列車は、葉の枯れた三尺位の棉の木が小さい白い棉の球を頂いて、恐らく、良いのを摘取つた後らしい棉の畑が、際涯もなく展けた曠野を走り通した。

歸途の天津丸でも、日本棉花會社の社員で、駐米の年限を終へ本社へ歸朝される人と同船して、色話を聞いた。

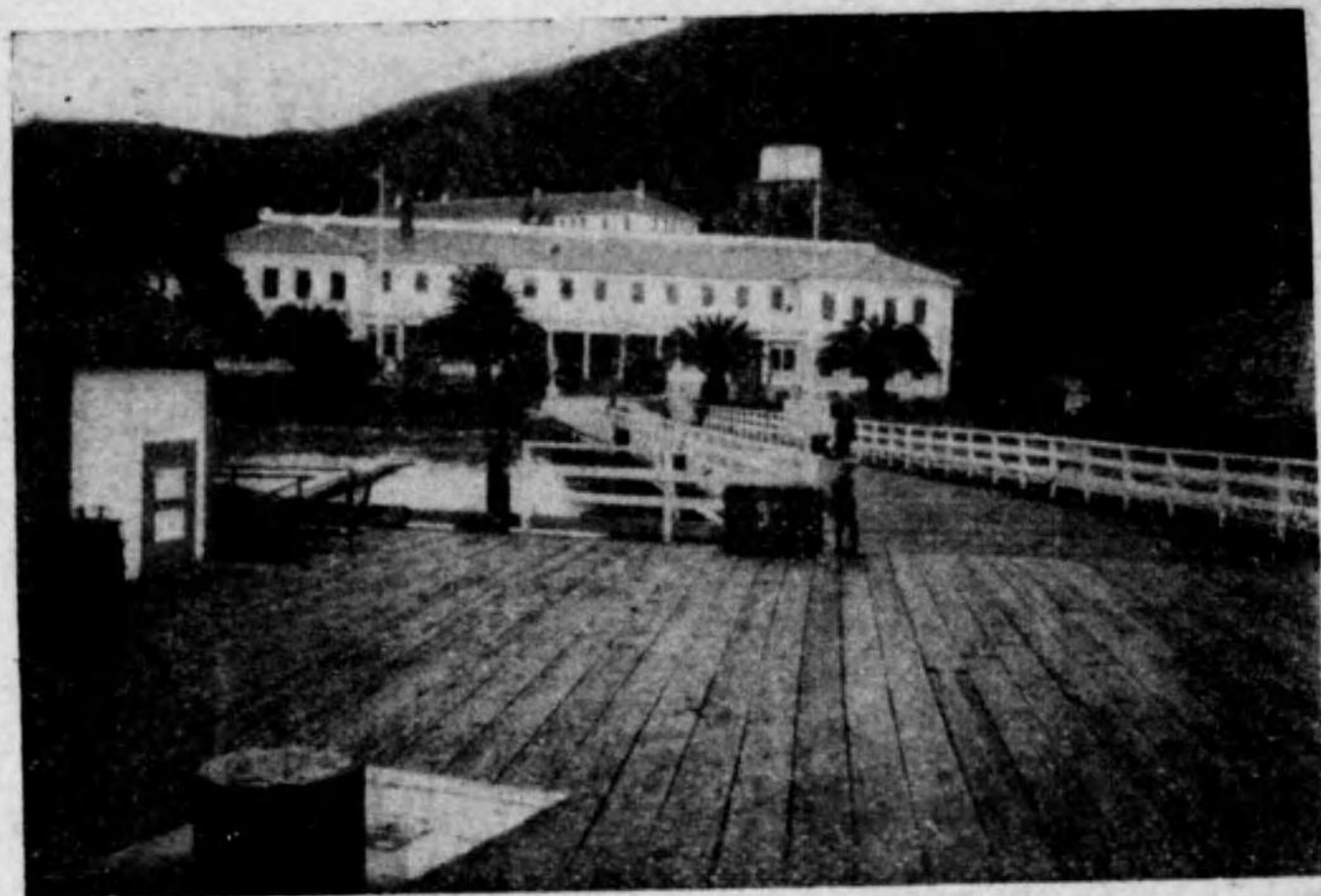
十七日の午後四時半、テキサス州のサン・アントニオ驛に停車した。大きな驛であり時間があつたので、構内散歩をしてゐると、服装は正しいが、あまり上品ではない三十歳の男が、跟けて来て何か話しかける。何んだか分らないので、分らないと言つて、直ぐ歩き出したら、追かけてスペイン語を話すかといふ。それが分つたので、否と答へ、立停つて凝と見ると、彼は外套の裏を返つて日本の在郷軍人章位の眞鍮の徽章を見せた。漸く、領事に注意されて居た事を思ひ出し、移民官かと尋ねたら、さうだと言ふ。バスポートを出して見せた。何處から何處へ行くかと問ふた丈けであつた。

翌十八日、テキサス州エルバソ驛でも同様に、散歩に出る支度をし、靴に鍵を下して立ち上つた處へ、四十歳の役人風の男が来て、昨日の男よりは態度もよく、鄭重に移民官である事を告げ、國籍、行先を尋ねた。早速旅券を見せたら彼は禮を言ひ、自分は日本人許り調べるのではなく、米國人も調べるのだと付加へた。後で地圖を見ると、昨日のサン・アントニオも、此處も、共にメキシコから出る汽車の線路との交叉點である。それで取調べるのであらうが、いさゝか不快だ。

この列車は大體メキシコ境に沿つて走るのであるが、恰も南米西海岸の如く、草木のない褐色の山脈が連らなり、夕方になると、暮色は遠くの山脈から次第に擴がり迫つて、來往する列車をさながら深い寂寞の内に引包んでしまふ。其の時に、薄暗い喫煙室へ、誰も居ないと思つて入つて行くと、隅の方に眼玉許り白い黒坊の給仕が居て突然ぬつと立上るので、とても吃驚する。十八日の午後五時半、アリゾナ州のフェアバンクに停車した。月が靜かに上つて美しかった。

その少の前に、ビスビイジャクソン交叉驛があつて、立札に、此の線の最高點で四、六七五呎、近くに高地氣候療養所ありと記してあつた。

この線はカリフォルニア其の他南方の果物生産地を控へてゐるので、途中實に無数の果物冷蔵列車と行き交つた。そして、カリフォルニア州に近づくに従つて、彼處此處に大きな果樹園が見られた。果樹園を見ると何んとなし收穫といふ事を聯想し、プロスベラスな氣持になる。南米でも、種々の果



桑港エンゼル島移民收容所



エンゼル島移民検査所

物の熟つてゐるのを見て同じ感じがした。

ロサンゼルスに著いて、ホテル・ビルチモアに入つた。可笑かつたのは、其處の大ホールに入つて、多勢の人が居る所へ、ブラジル以來持ち廻つた例の便利な乞食袋をゴロ

ゴロと轉し込んだ時、人々が驚いた顔をしてゐた事であつた。自分には目慣れて何んともないが、里馬邊から此方では見た事のない代物なのである。

このホテルは良いホテルで、サーヴィスも親切で便宜を計つて呉れた。室は六弗。洗面盤の處に飲用水が出る装置があるので大いに味はつた。食堂やダンスホールが廣い廊下傳ひにあつて、恰も十九日は市の會で、食堂には贅澤に着飾つたレデイが大勢居た。

往路太洋丸で同船した領事館の福岡君夫妻に十ヶ月目に此處で再會したのは嬉しかった。旅先で知人に巡り會ふ事は楽しいものである。大橋領事、高橋正金支店長にも御世話になり、一泊の豫定を遂に二泊したが未だ居足りない氣がした。廿一日、桑港著。

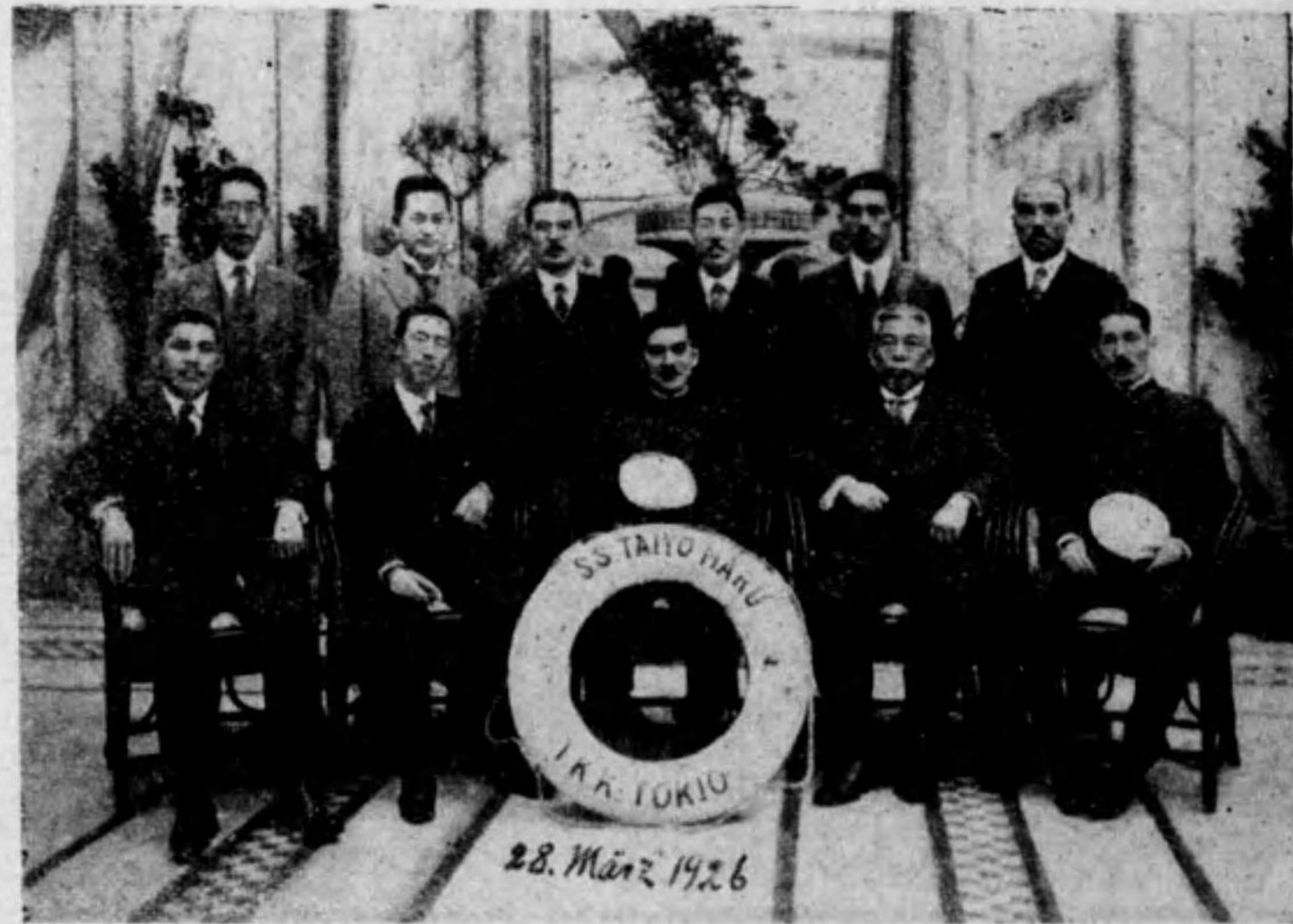
此處でも、往路太洋丸の同船客、桑港の總領事館の白倉夫妻に再會し、武富總領事、小島正金支店長の新知を得た。斯くて、廿六日、天洋丸に上船桑港を出帆、種々の見聞と思ひ出の數々を懐に、米國を後にした。ホノ、ルに寄航、知人に再會し、又、忽ち訣別する。

航海はホノル、着前後二日許り靜波に恵まれたが、以後連日波高く、船は揺れる揺れる。その爲めに船室の扉で小指に傷をするやら、食堂には必ず出たが食慾がすっかり減退するやら、さんくゝな難儀をして、十二月十三日午前、無事になつかしい本國に歸着したが、一週間程は胃の腑が調子悪く、弱り切つた。

附 篇 回

顧

行 一 國 衣 調



原石・者著・長船・原福・長務事りよ右 にて丸洋太
澤蘆・田太・村飯・村水・村田・口谷列後

附章 歸朝して

所感——文化——氣候——人情——在留邦人——交通——特産——注意事項
の二三

南米旅行の準備中の初め一ヶ月と、歸路の十日程、前後四十日北米に在つて、現代的物質文化の旺盛さを目撃し、南米旅行中、絶えず北米の印象と比較回顧したのであつた。伯國の首都リオ・デ・ジャネロ、サン・パウロ州の首府サン・パウロ市、アルゼンチン首府ブエノス・アイレスなどは、舊大陸や合衆國の都府に劣らず、首府としての各方面の施設が發達して居て、歐米の都に居るの感があるが、アマゾンの唯一の大都府ベレームなどには、尠くとも百年か二百年前の歐洲の都市を想はせるものがある。若干の新しい様式の建築物もあり、主要な街路だけは新装であり、又、上下水、電車、電燈、市場、病院等は歐米と大差はないが、なほ、生活の様式、風俗、人情、役所の執務、商店の仕事振りに於て、今日の歐米の都府に於けるそれらとはたしかに氣分が異つてゐる。

南米では、人情は敦厚、形式を重んじ、禮儀正しいやうに見え、熱暑の爲もあるか、歩調も悠然としてゐて匆忽の風がない。南米のアマニアン氣分といふのが、これであらう。大學出身者はドットー

ルと呼稱して世間から尊敬され自らも矜持してゐる。官憲の威厳は、日本の二十年前のそれに比敵するであらうか。生活は極めて安易である。

二十年以前に此處に移住し、寫眞業を主とし、傍はら獨逸品を商つてゐる獨逸人夫婦がゐた。心易くなつた彼氏は、此の土地の住み良い事を述べ、土地の人は歐洲人に比して一般に御世辭がよく、云つた通り必ずするのではないが言はれただけでも感じの良い事が多いと云つてゐた。ベレームに十年在住して居る柔道師範の前田光世君は、以前に北米各地、中米、南米の各都市を、弟子を連れて遍歴したけれども、此處が一番住み心地が良いと言つて居られる。約二ヶ月を暮して、大凡の状態を看取すことが出来たが、先年歐洲留學中、オーバーエステルライヒとチロールの田舎に居た事を思ひ出されて、人との交情の氣分は、ベレームも歐洲の上記の様な田舎に似て、日本人にはよく性に合ふ地方であると思はれた。

ブラジル人の氣風を窺ひ得た便宜な機會は、ベレームから伯國內地船—伯國政府補助船、沿岸航路船に二週間乗つた時の事であつた。相客は一二の外國人を除けば、皆伯國人であつた。勿論船員も伯國人である。食卓を、又、夜の社交室を常に共にした。假令、葡語は出来なくても片言で意志は通ずる。著者は葡語の動詞の使方に最も困つたが、一緒に居る時は教へて呉れた。

社交室で、大勢とよく無邪氣な遊びをした。鬼を中に入れて周圍の者が指環を廻し色々冗談を言ひ

乍ら、鬼に指環の行き先を當てさせる。著者は一度『私が持つてゐる』と言つてから、手早く隣の人に渡して置いた。鬼は著者の處に來て一杯喰はされたわけであつた。それ以來、一同の内の二十歳位の數名の若者が、著者にヨ・テーニヨといふニツクネームを付けて仕舞つた。打ち解けると實に愉快な人達である。又、若者の内にも随分鄭寧なのが居て、此方から心易だてに話しかけても、何時も禮儀正しく、とても眞面目に應へてゐる者もあつた。

子供も澤山乗つたが、小學年齢の男女兒は、日本の小學生徒と變らぬ惡戯をやる。併し、歐米の兒童によく見るやうな性質の悪いのはゐなくて、先づ行儀は良かった。夫人や娘さん達も日本の女性のやうで、モダンガール風の態度のものは見受けず、喫煙なども餘りしない。著者は社交室に居て喫煙し度くなると、室を出てやるやうにしたが、それと察すると、遠慮しないでも構はず呑めと、誰もがすゝめて呉れる。斯んな處なども日本に似てゐる。併し、伯國聯邦議會上院議員と云ふ老人が乗船してゐるが、彼氏は多少矜持が高かつた。

船員も慇懃で、船のサービスも日本船程度であり、ボーイは忠實で親切であつた。

この東沿岸航路で、途中上陸したナタール、レシイフェ、バイヤの三市で、見物と買物をしたが不愉快な思ひはしなかつた。

併し下層階級には教養のない者が多く、彼等は東洋のそれらと同じ様であるらしい。が、刃傷や喧

嘩沙汰は極めて少ないらしい。多くの南米通から、下層階級の話を書いて充分警戒して居たが、唯

一度、レシイフェで無頼な靴磨きに出會つた丈であつた。首府リオには一ヶ月餘滞在したが、歐洲の大都市と大差ない感じがした。接觸した人は醫家で、皆高等教育を受けた人達とて一般に慇懃であつた。獨逸で度々経験した驕慢(實はさうでないのも)な態度をするものはなかつた。ブエノスアイレス、サンチャゴ、リマでも、多数の醫事衛生の官吏學者に接觸したが、みな同じ感じで、歐米で見る様な不愉快な感じはなかつた。内的生活の點は分らないが、通じて悠揚不迫、鄭寧である。

南米の西海岸の都市の状況は東海岸に比して古い感じがした。日本の歐化しつゝある都市に比すれば、都市としての形式は、本家分家の關係上、歐米と同系統だけの事はあり、寺院、公園、博物館、圖書館とか、競馬場等は國力以上の設備をしてゐる様に見受けられたが。

北米は今度が初対面であつたが、何といつても歴史が新しい所とて、王宮、城址といった風のものがない爲め、都市の美觀に物足りぬ所がある。寺院も小さいし、公園の樹木、繪畫館の陳列品も貧弱で物寂しく、都市としての氣品といふべきものに缺けてゐる様に思つた。南米は、特種な樹木が良く生育し、その地固有の樹木の幹があつて美事に思つた。リオ・デ・ジャネイロには王宮が残つてゐて其の庭は立派なものであつた。議會の建物は、何處でも自慢されたが、リオでもブエノスでも、共

に規模が小さく、歐米に比して遙に見劣りがした。醫學の研究所は雙方共に立派なものであつた。然し、西海岸は比較できぬ程に文化程度がおくれて居る。

婦人の服装や髪は、東海岸では、スカートの短いのは稀だし断髪も非常に少なかつた。西海岸ではスカートの長いのが残つてゐる。断髪は見る事が出来なかつた。

智利や祕露の夫人は被衣を着けると聞いたが、平素は見なかつた。唯、日曜のお寺詣には大抵冠つてゐるが、以前のとは異つて薄い短い黒のを被り、顔は出してるが上品に思はれた。要するにラテンアメリカの婦人は、外觀的にはアングロサクソン系よりは日本人が見て嫌な感じがしないし、態度が優雅らしい。

南米は赤道以北に起り南は寒帯に達する廣大な土地である。一行の居たアマゾン流域は、それも眞に針頭大の場所だけ旅行したに過ぎないが、唯森と河との世界だし、南アルゼンチンは豊かな大平野西海岸は荒涼たる秃山積きと云つた風に、自然の姿態は往々先きく甚だしく異つてゐる。アマゾンに居た頃、暑さには慣れたが、暑いことは暑いので、時々日本の秋の空氣に浸つて見たいなどとも思つた。

アルゼンチンに往つた時は日本の秋のやうな氣候であつたが、これも思つた程快適ではなかつた。

寧ろ、寒冒などに罹つてはと懼れをなした位であつた。智利のサンチャゴ滞在の數日は、空気が何ん
となく軟く、心地が良かった事は嘗つて南米の何處でも経験しなかつた事である。日本を三月に立つ
て、歸朝したのは年の暮とて恰も日が短かく、寒くなつた頃であつて、數月間は四邊が暗くて物が良
く見えないやうに感じ不愉快であつた。それ程、彼地では光線が強く、物が瞭然と見えた。尤も著者
は相當度の強い近眼で、しかも熱帯ではクルークスのB眼鏡を用意してゐた。使用當初は妙であつた
が、五月頃からはよく見えるやうになり、氣分ももと通りになつた。
南米の所謂アマニアン氣風と言ふのを、十分に理解する迄滞在したわけではないが、その概念は知
る事が出来たと思ふ。

時間についての約束を守る點でも、アマゾンのベレームでも、多少間がのびるやうである。リオで
は數回約束の時間が二十分乃至三十分のびた経験をもつた。ブエノスでは時間を約束したわけではな
かつたけれども、或る大研究所を見學し度いと思つて、先づ紹介されてあつた衛生局長を訪問した
處、非常に忙がしさうで、著者の後にも面會者が押掛けてゐた。祕書に案内されて會つた處、立話で
濟さうと思つたのをマア〜と慇懃に客室に請じた。そこで、昔獨逸に長く留學した事のある局長
が流暢な獨逸語で話して呉れるので、釣り込まれて時間を忘れ、一生懸命に質問したりしてゐた。や
がて、是れから直ぐに研究所の見物をさして呉れと頼んだ處、明日が宜からうと言ふ。研究所の事だ
がある。

から朝早くから悠くり見學し度いと希望すると、局長は午後三時からが良いと言ふ。三時からでは
遅い様に思つて何故かと尋ねた處が、その時刻でないと皆が出揃はないと言はれて大きに驚いたこと
がある。

リマの衛生局へ數度行つたが、當初は日本公使館、領事館の方々に同伴し、お世話になつた。その
二度目、約束の時間五分前に公使館へ電話で、待つて居ると言つて來た。驚いて直ぐ往つたが公使館
からは三分許の距離であつた。公使館の方に、實に時間が正確ですねと言つたら、外國人に對しては
時間を守る事に注意して居るのだと説明された。

汽車には餘り乗らなかつたので、發着時間の確否は良く分らない。リオとサンパウロ間の汽車に特
等寢臺をとつた事があつた。ベッドは上下でなく、唯一つ、洗濯した許りのシイツを被せてあつた
が、所々に穴があいてゐた。洗面所は隣室と共同で、サイベリヤの一等車を思ひ出させられた。就寢
前に洗面所に入らうとしたら、隣室のレデイが入つてゐたので、喫驚して、自分の室に歸へつて來た
事を覚えてゐる。又一度普通寢臺をとつた。日本の二等寢臺と同じやうな設備であるが、北米程は心
地はよくなかつた。この邊りの汽車は時々顛覆する、乗るのは命懸けだと言ふ噂を聞いた。その年の
五月廿五日には、アンペウロ州内のアリアンサ耕地の移民列車が、正面衝突して死傷者を出した
と日本新聞に出てゐた。線路工事が完全でないらしい。

著者は、南米に行かぬか、主なる使命はアマゾン流域の調査であると云ふ官命の交渉があつた時、面白いなあと即座にお受けしたのであつたが、其の時はアマゾンに關する豫備知識が完全でなく、アマゾンは疫癘の地であり、非常に危険な處ではあるが、醫學的には面白からうと思つた。北米に滞在し、種々アマゾンに關する豫備知識を求め、又、往航の船中、一行の他の専門家が夫々讀書によつて研究したので、それらを綜合して、アマゾンの状況を稍々理解する事が出来た。そして、色々の危険を慮つてゐるが、行き着いて見ると實に案外であり、ベレームに著いた時などは、伽嘶の龍宮にでも来たやうに感じた。北米から、速力の遅い、龜のやうな貨物船に十九日も乗つて、茫々たるアマゾン大河に入り、夜半に三哩沖に假泊してベレーム港の燦爛たる電光のほのめきを望み、澤山の碇泊船の燈火を眺めることが出来、なつかしい邦人が大ランチで迎へに来て呉れ、旺んな歓迎を受けた際は全く歡喜した。ベレームから南下の航路の寄港地は、概ね、景色の良い小高い處で、港口にはダツチ・フトレスが残つてゐた。それが遠くからも近くからも大層美しい眺望をなして居た。

南米を一巡して、到る處で珍らしい物に出會つた。歐洲や北米を見た人は、悉く同感であらうと思ふ。唯、土地の言葉が出来ないので些細な事にまで色々苦勞をするが、在留同胞の厚情でそれも忘れてしまふ。果物や食物には色々變つた美味な物があつて、それらも旅情を慰める。醫學上には、その二三は外國にない稀れな病氣があつて、落着いて研究すれば材料は容易に珍きぬであらうと思はれ

る。動物學者、植物學者、藥用植物研究者、或は探鑛冶金その他の専門科學者が、歐米出張の序に一巡せられたならば、非常に研究すべく、見るべき面白い材料を發見せられる事と信ずる。若し幸に滞在が出来れば、獲る所莫大であらう。

ある處で、面白い事を端的に言つて呉れた邦人があつた。『どうも、日本からは移民ばかり送るが、しかも、從來の、それらの日本人サムプルは概して良くない。あなた方の様なサムプルが續々來て呉れれば、吾々邦人も肩身が廣くて嬉しく思ふ。何卒、此の邊を大威張で歩いて呉れ』などと、お互に大笑した事があつた。

サムプルの話の序に、一寸南米在留の日本人の普遍的な心理状態に就いて所感を述べたい。アマゾンに居た時、九年前に移民として秘露に渡航した一邦人が、恰かもそこに來合はして、會つて色々話をした。その男はどうも辛抱が足りないらしく、契約の土地に親しむ事が出来ず、同志少數と諸所を轉々し、アマゾン河の秘露國內の上流であるウカヤリ河を傳つて、イキトスの町に行つて數年働いた。そこはブラチル國境から九十邦里許り秘露に入つた處で、アマゾン本流の上端である。二千噸位の船はアマゾン河口から約一ヶ月かゝつて上つて來られる處であるが、彼は其處でも面白くないので、伯國東海岸は景氣がいいとの噂を聞いて、數名の同志と、アマゾンの流を時には歩き、時にはカノーで下り、或はカノーを印甸人に盜まれ腕力で取返へすなどの大冒険をやつた。其の遍歴談はトテモ面白い。

一九二五年にベレームに辿り着いて、路傍でアイスクリームを販賣して糊口し、その裏店の貸間に住んでゐるのであるが、その男は下層階級の西班牙語が上手で、ベレームに一年ゐる伯國語を話すやうになり、似たり寄つたりの連中と交際してゐるが、何か癪に障ると、『手前の國は三等國ぢやねえか、俺様は斯う見えても一等國民だ、一等國は世界には先刻御承知の英米佛と日本丈だぞ』と言つてやるなどと話した。サン・パウロに往つたときも、彼と略々似た様な邦人がゐる事をよく聞いたのであつた。諸國を巡り、有識階級にのみ接した所では、日本國民である事を常に幸福に感じたのであつたが、一方に斯んな事もあることを知り、殊に日本の移民を歓迎してゐる伯國に於て、又其の移民も其の土地で生活をしてゐるながら、そんな心理状態にあるのを見て、我が島國的教育、對外知識と觀念の程度の低いのを悲觀したのであつた。

南米視察は、日本から態々出かけるのは別として、歐米視察の序ならば甚だ便利である。英獨佛から、リオ、ブエノスヘナらいくらかも客船航路がある。獨逸のハンブルグから、リオに寄港してブエノス迄が一番遠いが、それでも十八日で行ける。その他、蘭船、伊船もある。南米一巡の日程は滯英中に作るのが一番便利だと言ふ事である。ブエノスから先きは夏期（九月以後）毎週二回の列車が智利に直通する。冬期はこれが不通であるから、西海岸へ出るには海路を迂廻せねばならない。西海岸では英米船が二週一回紐育に向ふ。智利、祕露船はあるが邦人間に評判がよく無い。バナ

マからは別の米船で紐育へ、又著者のとつたやうにニューオリンスへも往ける。墨國へ寄港する船もある。著者は西海岸の英米船の内小型の方に乗つたが、航順で大型の方に當る事も出来る。邦船では、西海岸は大正十五年からも東洋汽船であつたのが郵船の航船となつて、依然航海してゐる。その寄港出港を考慮し、利用しようとするれば便利も大であらう。西海岸航路は、智利のバルバレイソ、祕露のカヤオ、パナマ其他の諸港、墨國、北米のロサンゼルスにも寄るから、南米東海岸許りでなく西海岸の視察もお勤めしたい。西海岸のサンチャゴやリマを見た折は、ふと、リッパ・ヴァン・キンクルの浦島譚が思ひ出された。

伯國ではリオ・デ・ヂャネイロに著いた後、若し餘裕あるならば北部地方の視察を希望する。船は沿岸航路船が確かに二線ある。寄港時間の許す限り上陸視察すれば、如何に北ブラジル地方に將來商市として有望な處が多いかを知る事が出来るであらう。アマゾン地方の視察に於て、ブラガンサ鐵道沿線の視察、進んでは本支流を溯つてサンターレン、マナオス迄往かれるならば、アマゾン地方の本態を略推知することが出来る。ベレーム市から別にアマゾン汽船も出る。

リオからベレーム迄は航海十三日、毎週二回出航する。次に、伯國を訪うた序にはサン・パウロ州内の日本移民地の訪問は、缺く可からざる事でもあり、興味ある事でもある。一週間及至十日位の遍歴で移民地概況を知る事が出来る。

珍奇な土産物及び特産品に就ては、著者は紐育からベレーム迄の英船の食卓でブラヂリアン・ナッツを賞味した。ベレームに着いてからナッツが餘り澤山あり、無論安價でもあり、食べ慣れて當初程珍らしいと思はなくなつたが。ベレーム港の沖から大きなナッツ船が無數に發着し、凡て歐米に輸出せられてゐる。自然的生産物が多く、人工的生産物の非常に少ない伯國の、富源の一に數へることが出来る。ベレーム出發の際に澤山貫つて持て餘し、リオで邦人に分配した残り一升許りを他の品物の間にトランク詰めにして送つた。歸朝後賞味したが、少しも變りなかつた。後日アマゾンが邦人の手に開拓されたならば、輸入されて吾國のレストランの食卓を賑はすであらう。

ステツキにはアマゾンから蛇紋樹その他の硬質の樹木で作つた品が産る。蛇紋樹の枝はリオ邊りでは、日本人にも珍らしいから土産に買ひ求めるので價が競り上がる。高いのは六〇圓もし、飾付の程度によつて更らに高價なものも出来る。リオでステツキ屋も何軒か見廻つたが、品種は少なかつたが、ベレーム市で其材料を見た時、目の揃つた良いの選ぶので、自然價も高いのであらうが、他の種のもので安くて風雅なのが幾種もあつて、色も種々雑多で、木目も多種多様、そんなのを澤山送れば良かつたと後悔した。併しベレームの製品は、ステツキの型が少し田舎染みて垢抜けがしてゐない。リオのは材料を巴里に送つて、加工したのを逆輸入して居るのださうだから、立派であると同時に價も高いわけである。

兎に角、伯國での木材産地はアマゾン地方であつて、ステツキに限らず極めて特殊な木材を産出する。將來アマゾンから多種の床柱、美術的工作品の原材料等が輸出される機會もあらう。實際、千數百哩のアマゾンの殆んど大部分大森林で、その種類が如何に多いか計り難い。一般に硬材が多いといふことであるから、建築、造船、枕木、土木、車輛類用材として、或は加工裝飾用材、家具、細工品用として聲價を得べく、製紙用パルプ原料等にも無限の供給力がある。運搬は河川を利用し筏に流せば容易である。とにかく、木材事業は有利な事業の一つに數へることが出来る。

アマゾンの動物に關しては、何しろ廣大な熱帯森林故、多種の猛獸が跳梁してゐるやうに人々は想像するであらうが、其の想像は實際には全然裏切られ、猛獸はゐない。猿を最大として野猪とか鹿の類、猿猴の類位のものである。他に、ジャカレーと稱する鰐魚がゐるが、クロコダイルの如きものではなく、習性極めて温順である。皮は鹽漬にしたものをベレームで製造し、又袋用として鞣して賣つてゐるが、亞弗利加産のと異つて質は劣る。

魚も種類は實に多種で、アマゾン河だけで四五百種の魚がゐるといふ。ピラルクーといふ奴は、經濟的價値を多分に持つてゐる食用にも供せらるゝと。電氣鰻の如き珍奇なものもゐる。

バラには寶石も多少出る。寶石店も立派なのが二つ許りあつたが、リオの寶石店には多種を揃へて居た。ミナスゼラス州が寶石の産地として知られてゐる。先年日本の地質學者が來て、伯國産のアグ

アマリンは珍奇であり、且つ頗る良質であると賞讃されたと聞いたが、藍色で、それに濃淡があり光線の曲折も面白く、値も高低種々あつた。又黄を帯びた淡紅色で上品なのが、他國では餘り見たことのないものであつた。

又、熱帯産小鳥は實に美しく、剥製品は優美な裝飾となるから良い土産である。蝶は伯國の名産で、其の翅を色々利用し、意匠して裝飾品を作つてゐるが誠に美事なものである。

マテ茶の急須とパイプは日本人に風雅に見える。置物等にもなるが良質の物でなければいけない。之は荷物にしても携帯しよく壊れないから良い土産になる。日本室の茶戸棚に飾つて良いやうなものもある。

毛皮は、秘露の内奥山間には種々特有な動物がゐる。南米旅行記には其の寫眞がよく載せてある。其等動物の毛皮を販賣してゐる。バルパレイソから六日目の秘露モロンド港では、船の碇泊中毛皮を賣りに来る。目の鑑く人なら巧い掘出し物が出るであらう。寶石等と違つて偽物は少ない。日本で買ふ事を考へると、素人目に良い品が非常に安く思はれた。里馬市には良質のものがあるから、慣れた邦人に相談したならばもつと安價に良いのが得られるだらう。輸出を禁止してゐる種類があり、夫等を手に入れるのには手續きを要する。

カイヤオ港からバナマへの途中、寄港地では客船へバナマ帽を賣りに来る。米貨五、六弗から二〇

弗位、友人への土産として恰好のものがあらう。

秘露にはインカ帝國時代の古陶器があつて、風雅な美術品である。陶器愛好家には垂涎の品があるさうだ。

南米東海岸の熱帯地方に於て、衛生上注意すべき項を二三述べて置く。都會に於てはマラリヤの心配はないが、内奥地を旅行する場合にはマラリヤに注意せねばならない。豫防的にキニーネを服用すれば安全で、土地の醫師も之を推奨してゐる。西海岸では里馬にマラリヤがある。又チフスは到る處にある。が、日本でより僅か餘計に飲食物に注意を拂へば怖るゝには足りない。熱帯地方に於ては飲酒は慎むべきである。昔から日本では養生家は腹巻を常用してゐるが、これは確かに健康にいらしい。熱帯地方では著者も常用した。夜には熱帯地特有の現象で氣温が著しく降下するの、南米に於ては寒冒や流行性感冒が甚だ多いから、注意せねばならない。日中に活動すると汗が出るのが、歸宅後の水浴も汗の收まるのを待つてからした方がよい。外出から歸つてその儘すぐ水浴をすると寒冒に罹り易い。毛布を一枚携帯すると非常に役に立つ。

外國船に乗つた時、船中の小遣として、其國の貨幣を若干用意してゐると便宜である。著者は米貨

を主とし、又出帆地及到着地の金を用意したけれど、獨、英船に乗る都合になつて、計算は凡て獨英でされたので極めて不便であつたことを付言する。

昭和六年拾月廿三日印刷
昭和六年拾月廿八日發行

衛生視察南米紀行
定價 金壹圓八十錢

著者 石原喜久太郎

發行者 東京市日本橋區本石町三ノ二四
株式會社 博文館

右代表者 大橋進一

印刷者 東京市小石川區久堅町一〇八
君 島 潔



發行所

東京市日本橋區 株式會社 博文館
本石町三丁目
振替東京二四〇〇番
電話小石川七八〇〇番

明日の南米への絶対指針

南米の核心に奮闘せる

同胞を訪ねて

伯國大使館
書記官

野田良治 著

各方面の識者が多大の期待をよせたる最新の實地踏査による
紹介。一字一句悉く著者の足跡ならざるはなし。

第一篇……『南米の核心』とは——交通上の僻境——河、また河——マテイラ河、探検——短

い鐵道の長い歴史——ボ國領アマゾンア——グワボレー河——文明の前哨——我同胞の躍進

第二篇……マテイラ河——リベラルタ町——ベニ河——マモレー河——トゥリニダツト市——

『南米核心』の同胞よ——著者より讀者へ。

(四六判洋裝美本
定價一圓六十錢)

實查
十八年

ブラジル人國記

六版

四六判上製
六八〇頁

定價 二・八〇
送料 一・八

同氏 著

世界の
大寶庫

新

南

米

三版

四六判上製
五五〇頁

定價 二・六〇
送料 一・八

61
407

終